

深江地区ほ場整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告・1

木舟・三本松遺跡

—福岡県二丈町所在・弥生時代中期甕棺墓群の調査—

二丈町文化財調査報告書

第 9 集



1 9 9 4

二 丈 町 教 育 委 員 会





例 言

1. 本書は深江地区県営ほ場整備事業に伴い発掘調査を実施した二丈町大字深江字木舟に所在する木舟・三本松遺跡の報告書である。
2. 発掘調査は福岡県福岡農林事務所の委託により、二丈町教育委員会が国庫及び県費補助を受け実施した。
3. 本書に使用した遺構実測図、遺物実測図の作成は、古川秀幸、村上 敦が行ない、製図は村上が行った。
4. 本書に使用した写真のうち、遺構、遺物写真は村上が撮影し、空中写真は「空中写真企画」に委託した。なお、巻頭図版1及び図版23は岡 紀久夫氏による。
5. 本書で使用する方位は全て座標北である。
6. 題字、表紙画は古川廣和氏の筆による。
7. 本書の執筆、編集は村上が行なった。

本文目次

I. はじめに	1
1. 調査に至る経過	1
2. 遺跡の位置と環境	2
II. 発掘調査の記録	5
1. はじめに	5
2. 遺構	6
1) 甕棺墓	6
2) 大石	25
3) 溝状遺構	26
4) 土壌	27
3. 遺物	30
1) 甕棺	30
2) 土器溜り出土の甕棺	54
3) その他の土器	56
4) 朝鮮系丹塗磨研土器	58
5) 甕棺墓内出土遺物	58
III. おわりに	60

挿図目次

第1図	周辺主要遺跡分布図 (縮尺 1/25,000)	3
第2図	遺跡周辺地形図 (縮尺 1/2,500)	4
第3図	甕棺墓配置図 (縮尺 1/400)	7
第4図	1,2,3,4,5,6号甕棺墓実測図 (縮尺 1/25)	9
第5図	11号甕棺墓実測図 (縮尺 1/20)	10
第6図	7,8,9,10,12,13号甕棺墓実測図 (縮尺 1/25)	11
第7図	14,15,16,17,18,21号甕棺墓実測図 (縮尺 1/25)	13
第8図	19,20,22,23,24,25号甕棺墓実測図 (縮尺 1/25)	15
第9図	26,27,28,29,30,31号甕棺墓実測図 (縮尺 1/25)	17
第10図	37号甕棺墓実測図 (縮尺 1/20)	18
第11図	32,33,34,35,38,39号甕棺墓実測図 (縮尺 1/25)	19
第12図	43号甕棺墓実測図 (縮尺 1/20)	20

第13図	40, 41, 42, 44, 45, 46号甕棺墓実測図 (縮尺 1/25)	21
第14図	48, 49, 50, 51, 52, 54号甕棺墓実測図 (縮尺 1/25)	23
第15図	59, 60号甕棺墓実測図 (縮尺 1/25)	24
第16図	1号大石実測図 (縮尺 1/30)	25
第17図	2号大石実測図 (縮尺 1/30)	25
第18図	3号大石実測図 (縮尺 1/30)	26
第19図	4号大石実測図 (縮尺 1/30)	26
第20図	溝状遺構平面実測図 (縮尺 1/60)	26
第21図	23号土墳実測図 (縮尺 1/40)	27
第22図	2, 6, 11, 18, 21号土墳実測図 (縮尺 1/40)	28
第23図	24, 25, 26, 27, 28, 29, 30号土墳実測図 (縮尺 1/40)	29
第24図	甕棺墓群の時期幅を示す甕棺	30
第25図	胴部凸帯幅の偏差	31
第26図	胴部凸帯幅と長さの関係	31
第27図	1, 2, 3, 5号甕棺実測図 (縮尺 1/8)	33
第28図	6, 7, 8, 9号甕棺実測図 (縮尺 1/8)	35
第29図	10, 11, 12, 13, 14号甕棺実測図 (縮尺 1/8)	37
第30図	15, 17, 18, 19号甕棺実測図 (縮尺 1/8)	39
第31図	20, 21, 22, 23号甕棺実測図 (縮尺 1/8)	41
第32図	24, 25, 26, 28, 29号甕棺実測図 (縮尺 1/8)	43
第33図	30, 31, 32, 33号甕棺実測図 (縮尺 1/8)	45
第34図	34, 35, 37, 38号甕棺実測図 (縮尺 1/8)	47
第35図	39, 40, 41, 42号甕棺実測図 (縮尺 1/8)	49
第36図	43, 44, 45, 46号甕棺実測図 (縮尺 1/8)	51
第37図	48, 49, 50, 51, 52号甕棺実測図 (縮尺 1/8)	53
第38図	60号甕棺及び土器溜り出土の甕棺実測図 (縮尺 1/8)	55
第39図	土器溜りほか出土土器実測図・1 (縮尺 1/6)	56
第40図	土器溜りほか出土土器実測図・2 (縮尺 1/6)	57
第41図	朝鮮系丹塗磨研土器実測図 (縮尺 1/3)	58
第42図	甕棺墓棺内出土遺物実測図・1 (縮尺 2/3)	59
第43図	甕棺墓棺内出土遺物実測図・2 (縮尺 1/2)	59
第44図	遺構配置図	(付図)

表 目 次

表 1	甕棺墓一覧表	24
表 2	管玉計測表	58

図 版 目 次

巻頭図版 1	甕棺墓棺内出土遺物	c	21号甕棺墓
巻頭図版 2	甕棺墓棺内出土遺物検出状況	d	22号甕棺墓
図版 1	木舟・三本松遺跡全景 1	e	23号甕棺墓
図版 2 a	木舟・三本松遺跡全景 2	f	24号甕棺墓
b	遺跡上空から可也山を望む	g	25号甕棺墓
図版 3 a	11号甕棺墓磨製石剣切先出土状況	h	26号甕棺墓
b	37号甕棺墓磨製石剣出土状況	図版 8 a	27号甕棺墓
図版 4 a	43号甕棺墓硬玉製勾玉出土状況	b	28号甕棺墓
b	43号甕棺墓硬玉製勾玉出土状況近撮	c	29号甕棺墓
図版 5 a	1号甕棺墓	d	29, 30号甕棺墓
b	2号甕棺墓	e	31号甕棺墓
c	3号甕棺墓	f	32号甕棺墓
d	4号甕棺墓	g	33号甕棺墓
e	5号甕棺墓	h	34号甕棺墓
f	6号甕棺墓	図版 9 a	35号甕棺墓
g	7号甕棺墓	b	38号甕棺墓
h	8号甕棺墓	c	39号甕棺墓
図版 6 a	9号甕棺墓	d	40号甕棺墓
b	10号甕棺墓	e	41号甕棺墓
c	12号甕棺墓	f	42号甕棺墓
d	13号甕棺墓	g	44号甕棺墓
e	14号甕棺墓	h	45号甕棺墓
f	15号甕棺墓	図版10 a	46号甕棺墓
g	16号甕棺墓	b	48号甕棺墓
h	17, 18号甕棺墓	c	49号甕棺墓
図版 7 a	19号甕棺墓	d	50号甕棺墓
b	20号甕棺墓	e	51号甕棺墓

	f	52号甕棺墓		c	28号甕棺
	g	59号甕棺墓		d	29号甕棺
	h	60号甕棺墓		e	31号甕棺
図版11 a		1号大石出土状況	図版17 a		32号甕棺
	b	2号大石出土状況		b	33号甕棺
	c	3号大石出土状況		c	34号甕棺
	d	4号大石出土状況		d	35号甕棺
	e	大石出土状況		e	37号甕棺
	f	23号土壇		f	38号甕棺
図版12 a		1号甕棺	図版18 a		39号甕棺
	b	2号甕棺		b	40号甕棺
	c	3号甕棺		c	41号甕棺
	d	5号甕棺		d	44号甕棺
	e	6号甕棺		e	42号甕棺
図版13 a		7号甕棺		f	43号甕棺
	b	8号甕棺	図版19 a		46号甕棺
	c	9号甕棺		b	45号甕棺
	d	10号甕棺		c	48号甕棺
	e	11号甕棺		d	49号甕棺
	f	12号甕棺	図版20 a		50号甕棺
図版14 a		18号甕棺		b	51号甕棺
	b	13号甕棺		c	52号甕棺
	c	14号甕棺		d	60号甕棺
	d	15号甕棺		e	土器溜り出土の甕棺・1
	e	17号甕棺		f	" "・2
	f	19号甕棺-1	図版21 a		朝鮮系丹塗磨研土器
	g	19号甕棺-2		b	土器溜り川土の甕棺・3
図版15 a		21号甕棺		c	" "・4
	b	20号甕棺	図版22 a		土器溜りほか出土土器・1
	c	22号甕棺		b	" "・2
	d	23号甕棺		c	" "・3
	e	24号甕棺		d	" "・4
	f	25号甕棺		e	" "・5
図版16 a		30号甕棺		f	" "・6
	b	26号甕棺	図版23		甕棺墓棺内出土遺物

I. はじめに

1. 調査に至る経過

二丈町は福岡県の最西端に位置し、東に前原市、西に佐賀県浜玉町に接し、背振山系を背負い、玄海灘に面した人口13,000人足らずの小さな町である。近年、福岡都市圏の膨脹に伴い町は徐々にその型を変えようとしているが、平野域の大部分が水田として利用され、農業が基幹産業として位置づけられている。そのことにより福岡県は、農業の発展を阻害している土地条件、用排水路及び道路の悪条件を改良し農業経済の発展を図るとして、深江地区において5ヶ年間に及ぶ大規模な場整備事業を計画した。二丈町教育委員会は、その事業開始の前年度において県農政部農地課より実施計画地区内の文化財の有無について照会を受け、県農林事務所との協議の結果、事業開始以前に試掘調査を行うこととなった。しかしながらその当時、町教育委員会には文化財担当職員は一人しか在職しておらず、多忙の極みの中に試掘さえもする時間的余裕をもたない状態であった。その為、試掘を行い得ないうちに工事が開始され、結局は急遽採用された文化財担当職員によって事業開始直後に行なわれた。その結果、大字深江字木舟256周辺において甕棺墓群の存在が確認されたため、町教育委員会は県農林事務所に報告し、計画変更の要請をしたが、該当地区が全計画の要的役割を持つ重要な地点であるために計画の変更はできないとの返答を受け、平成3年度の国庫補助事業として発掘調査を行なう事となった。調査期間と調査組織は下記の通りである。

調査期間 1992（平成4）年1月13日～1992年3月5日

調査組織

調査主体	二丈町教育委員会	教育長	吉村 昌幸
		教育課長	庄島 正
		同和教育係長（現・教育課長補佐）	宮崎 晶之
調査担当		社会教育係主事	村上 敦
発掘作業従事者	内田京子、内田美智子、内田マツヨ、須古井節子、田中栄一、田中靖子、原口志津子		
整理作業従事者	木下文子、古藤紀子、加茂織江、瀬戸利之		

なお、調査にあたっては、同僚の古川秀幸氏に多大なる援助を受け、福岡県教育委員会の中間研二氏をはじめとして、多くの方々の指導を受けた。また、試掘及びに表土剥ぎ段階においては、ゆ力重機の山科英雄氏の技術と人柄に助けられた。末筆ながら記して感謝します。

2. 遺跡の位置と環境

遺跡は二丈町大字深江字木舟に所在する。

深江地区は、かつては糸島地方の西の玄関口として栄えた唐津街道筋の街であり、周辺部は農村、漁村的な性格をもつ。その歴史は古く、神功皇后征韓にまつわる伝説や旧跡が残り、万葉集にもその名が詠われる。また延喜式にはこの地に駅家が設置され5頭の駅馬が配置されていたことが記録されている。その為、幕政時代の学者の中には伊斗＝深江と考えるものもあった。このことは現在の考古学的事象の中では誤りとせざるを得ないが、深江地区が伊都国の玄関口としての性格をもっていたことは地理的環境から見ても十分に考えられる事である。そのことを直接的に傍証する訳ではないが、一貴山・深江平野の周辺部には多くの重要な遺跡の存在が確認されている。橋口達也氏によって「弥生時代早期」が提唱される起因となった石崎・曲り田遺跡はこの平野の南辺部地域に位置し、東辺部の丘陵上には2面の後漢鏡と8面の三角縁神獸鏡が出土した一貴山銚子塚古墳が位置している。さらに近年の町教育委員会による調査によっても、弥生時代前期の支石墓と甕棺墓群から成る石崎・矢風遺跡、弥生時代後期の漢式土器などが出土した深江・井牟田遺跡などが確認されている。

木舟・三本松遺跡は、一貴山・深江平野の西部、二丈岳より流出する一貴山川による沖積平野の旧砂丘上、現在の海岸線からは約1kmの地点に位置する。一貴山・深江平野の広大な水田地帯の大半は、昔は海であったと言われていた地域で、故原田大六氏による分布調査においても遺跡の存在しない地域とされ、県教育委員会編集の文化財分布地図においても空白地帯となり、何らの記載もされていない。今回の木舟・三本松遺跡の発見は、その空白地帯を見直し、再検討を迫るものとなった。以下に今回の深江地区は場整備事業に関連して新たに発見され現在までに調査された遺跡の概略を示す。

木舟の森遺跡—二丈町大字深江字木舟所在

平成4年度調査。調査面積約7,000㎡。中世初期の館跡である。中心部は調査範囲から外されることとなったが、それを取り囲む数本の溝状遺構が検出された。最長のものは約84m、最大幅のものは約5.5mを測り、大量の輸入陶磁器や国産土器が出土。平成6年度報告予定。

上深江・小西遺跡—二丈町大字上深江字小西所在

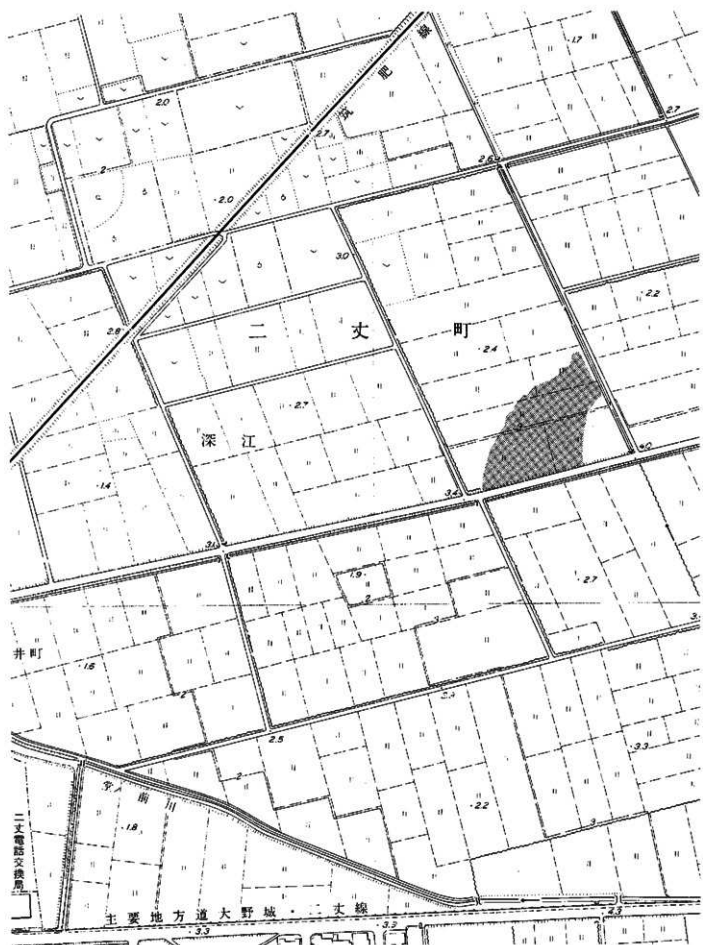
平成5年度調査。調査面積約3,000㎡。縄文時代後期中頃の住居跡や弥生時代早期の掘立柱建物跡を検出。縄文時代の遺構の周辺からは大量の縦長剥片及び剥片鏃が出土した。また、弥生時代早期の掘立柱建物跡は、高床式倉庫跡である可能性が高い。

平成7年度報告予定。



第1図 周辺主要遺跡分布図 (縮尺 1/25,000)

- | | | |
|-------------|-------------|--------------|
| 1. 木舟・三本松遺跡 | 2. 木舟の森遺跡 | 3. 上深江・小西遺跡 |
| 4. 深江・井牟田遺跡 | 5. 石崎・曲り田遺跡 | 6. 石崎・矢風遺跡 |
| 7. 徳正寺山古墳 | 8. 波呂・二塚古墳 | 9. 一貴山・銚子塚古墳 |



第2図 遺跡周辺地形図 (縮尺 1/2,500)

II. 発掘調査の記録

1. はじめに

調査区とその周辺は広大な水田域の一角であり表面は平坦に整備されていたが、重機によって水田耕作土を除去してゆくと、遺構面である目の細かい白褐色の砂地が北東方向に向かって緩やかな傾斜をもって下っており、東側、西側にはそれよりもやや角度のある緩斜面が確認された。つまり、遺構は低砂丘の先端部分に築かれている事になる。

また、水田面から遺構面までの深さは約30cm程度しかなく、遺構は著しく損傷を受けていた。これは過去の耕作によるものだけではなく、遅くとも江戸時代初期に始まった周辺の開拓事業による土取りによるものだと考えられる。さらに幅30cm、深さ20cm程の溝が遺構面を縦横にはしり、弥生時代以後の遺構を水平方向のみならず垂直方向にも破壊していた。この溝は互いに直交しながら直線的に形成されており、白い砂地の中に明瞭な黒い線となって残されていた。当初は、古代の農耕に伴う何らかの遺構ではないかとの想定もしたが、溝の性格、及び時期の判断もしかね、この溝を掘り下げた場合、しまりのない砂地に掘り込まれた遺構の主体を占める甕棺墓の掘り方が崩れてしまい、時間的な余裕もなかったので調査対象外とし、掘り下げは行わなかった。その為、甕棺墓の掘り方のプランも不明瞭な箇所が多かったが、明瞭な線と線を繋ぎながら不明瞭な線は推定線によって掘り下げる事とした。

遺構は弥生時代中期の甕棺墓が主体を占め、計53基が検出された。表土剥ぎ段階において廃土中から管玉が発見されていたため、副葬品をもつ甕棺墓群であるとの想定をし、調査を進めた。最終的には、その内の9基から副葬品その他の遺物が出土した。石剣、及び勾玉は出土状況を確認できたが、管玉類はフルイがけを行ない検出したため、出土状況は明らかにできなかった。

また、甕棺墓群の北側の緩斜面は土器溜りを形成しており、甕棺や、転用棺として利用されていたものと思われる日常土器などが包含されていた。このことは、削平により完全に失われた甕棺墓も少なくない事を示している。遺構面が砂地であり、土器が引き抜き易かったためか、墓として残されているものよりも、破壊され廃棄されたこれらの土器の方が残りが良い。また、土器溜りが形成される北側緩斜面では、支石墓の上石を思わせる4基の大石が検出された。下部構造は確認されず、土器溜り内の甕棺と同様に、破壊され、廃棄されたものと思われるが、この墓群が支石墓、或いは標石を伴う墓を伴っていた可能性がある。しかし、その周辺部からは1点であるが弥生時代早期の朝鮮系丹塗磨研土器が出土しており、それらがどの時期において構築されたかは明らかではない。

なお、調査区の町道を挟んだ南側は平成7年度には場整備が予定される区域であり、今回の調査では明らかにできなかった甕棺墓群の全容を窺い知る事ができるであろう。

2. 遺構 (付図参照)

1) 甕棺墓

調査区内において、計53基の甕棺墓を検出した。大半が大型の専用棺を用いたものであり、中型棺を用いるものが6基、転用棺を用いたものが5基である。大型棺を成人用、中型棺を小児用、転用棺を乳幼児用の棺とするならば、成人、小児、乳幼児の比率はおおよそ8:1:1となり成人の占める割合が高いものとなる。また、副葬品、その他の遺物を出土した甕棺墓は計9基で、総数の約17%に相当し、その内、中型棺を用いるものが2基、転用棺を用いるものが1基である。つまり、副葬品を持つ者の3分の1が未成人であることになり興味深い。しかし、削平により完全に失われた甕棺も少なくないものと思われるので、その点は考慮すべきであろう。

甕棺墓はいくつかの群に分かれて散在する。細かく分ければ、数基ずつが一つの群を形成し、緑蔭の小集団墓の集まりといった感もあるが、ここでは触れない事とし、A群～E群の5群に大別し、説明の助けとする。

A群の甕棺墓

調査区の南西部に位置し、K1～K12、K16、K60の14基の甕棺墓がこれに属する。K4を除くすべてが専用棺を用いている。K11の棺内からは磨製石剣切先1点、磨製石鏃1点が出土。K12の棺内には管玉1点が副葬される。

B群の甕棺墓

調査区南部に位置し、K17～K23、K26～K31、K37、K48～K52の19基の甕棺墓がこれに属する。K17、K18に転用棺が用いられ、他は専用棺である。K37には磨製石剣1点が副葬される。

C群の甕棺墓

調査区のはば中央に位置し、K24、K32～K35、K38、K59の7基の甕棺墓がこれに属する。K34のみが転用棺である。K32には管玉3点、K33には管玉1点、K35には管玉2点が、それぞれ棺内に副葬される。

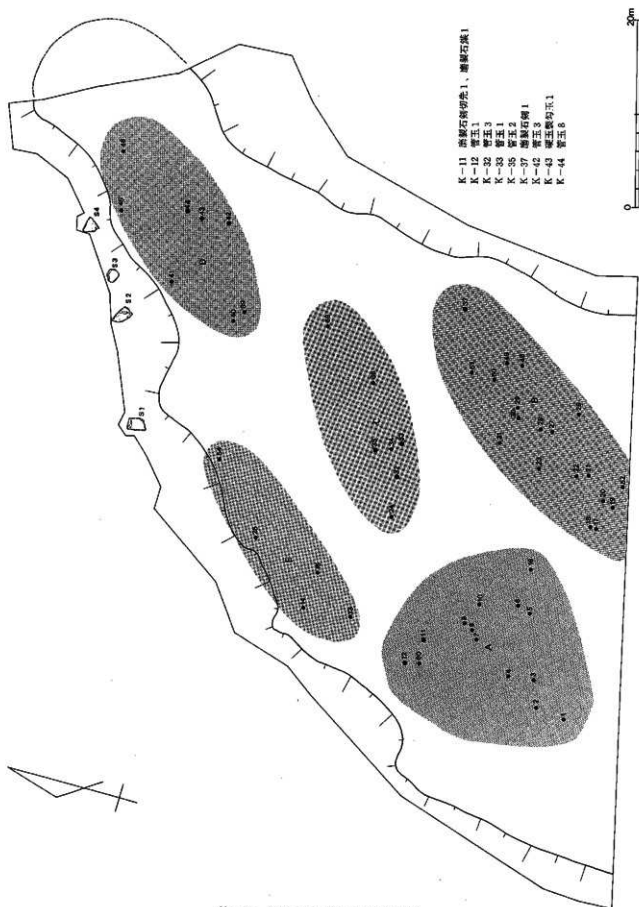
D群の甕棺墓

調査区の北部に位置し、K39～K46の8基がこれに属する。K44のみが転用棺である。K42には管玉3点、K43には硬玉製勾玉1点、K44には管玉8点がそれぞれ棺内に副葬される。

E群の甕棺墓

調査区の北西部に位置し、K13～K15、K25、K54の5基がこれに属するが、群を成すというよりも、どの群にも属さないものの集まりといった感もある。

以下に各甕棺墓の詳細を記す。



K-11 新发现的墓穴1, 新发现的墓穴1
 K-12 墓穴1
 K-32 墓穴3
 K-33 墓穴1
 K-35 墓穴2
 K-37 新发现的墓穴1
 K-42 墓穴3
 K-43 新发现的墓穴1
 K-44 墓穴6

第3图 墓穴配置图 (縮尺 1/400)

1号甕棺墓 (第4図、図版5a)

A群の南西隅に位置する合口式の成人棺である。上甕と下甕の口径差が大きく、合口部に粘土を詰めた痕跡があったが、あまり積極的なものではない。上甕、下甕ともに約3分の2を欠損する。墓壇の残存状況は長軸130cm、短軸75cmの楕円形を呈する。主軸方向はS-10°-Eを示し、ほぼ水平に埋置される。上甕には大型の鉢形土器が用いられる。

2号甕棺墓 (第4図、図版5b)

A群の南西部、1号甕棺墓の北約2m、3号甕棺墓の南西約2.3mに位置する。損傷が著しく、下甕と思われる棺の埋置された状態での下半部を平面的に残すのみであるが、中型の専用棺を用いる甕棺墓である。墓壇の残存状況は長軸97cm、短軸67cmの楕円形を呈する。主軸方向はN-14°-W付近を示し、ほぼ水平に埋置されていたものと思われる。

3号甕棺墓 (第4図、図版5c)

A群の南西部、2号甕棺墓の北東約2.3m、4号甕棺墓の南約2.2mに位置する中型の甕棺であるが、上半部が欠損しているため蓋部の形態は不明である。胴部凸帯と底部のほぼ中間部に穿孔がなされる。墓壇の残存状況は長軸70cm、短軸65cmの不整円形を呈する。主軸方向はS-80°-Wを示し、約45°の傾斜角をもって埋置される。

4号甕棺墓 (第4図、図版5d)

A群の南西部、3号甕棺墓の北約2.2mに位置する。破損が著しく、殆ど甕棺墓としての形状を呈していないが、口縁部の形状から乳幼児用の転用棺であると思われる。墓壇の残存状況は長軸65cm、短軸60cmの不整円形を呈する。破壊された時点で動いた可能性は高いが、口縁部の残存状態は主軸方向S-7°-Eを示す。傾斜角は不明であるが、ほぼ水平に埋置されていたものと思われる。

5号甕棺墓 (第4図、図版5e)

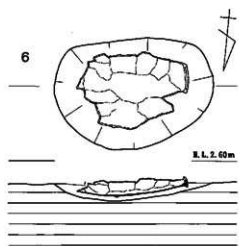
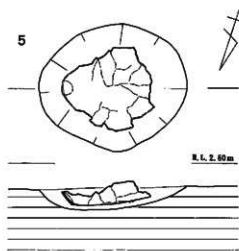
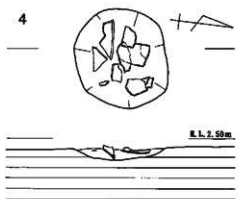
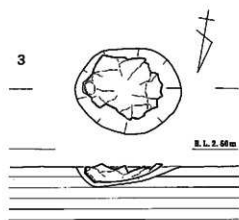
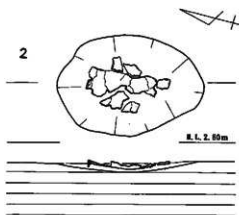
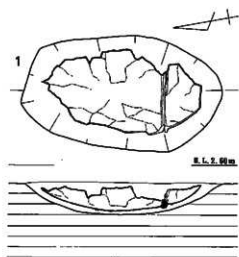
A群の南東部、6号甕棺墓の南約0.7mに位置する成人棺である。上半部欠損により蓋部の形態は不明。墓壇の残存状況は長軸97cm、短軸85cmの不整円形を呈する。主軸方向はS-73°-Wを示し、約37°の傾斜角をもって埋置される。6号甕棺墓との新旧関係は明らかにできないが、主軸方向が近く、どちらかを意識して併設された感がある。

6号甕棺墓 (第4図、図版5f)

A群の南東部に位置する成人棺で、5号甕棺墓の北約0.7mに隣接する。上半部欠損により蓋部の形態は不明。墓壇の残存状況は長軸105cm、短軸73cmの不整楕円形を呈する。主軸方向はS-85°-Wを示し、約15°の傾斜角をもって埋置される。

7号甕棺墓 (第6図、図版5g)

A群の中心部に位置する成人棺で、8号甕棺墓の南約30cmに近接し、それとの切り合いがあった筈であるが現況からは判断できない。上半部欠損により蓋部の形態は不明。墓壇の残存状況は長軸91cm、短軸65cmの不整楕円形を呈する。主軸方向はS-25°-Eを示し、約26°の傾斜角をもって埋置される。



第4图 1,2,3,4,5,6号窣堵基实例图 (缩尺 1/25)

8号甕棺墓 (第6図、図版5h)

A群の中心部に位置する成人棺で、7号甕棺墓の北約30cm、9号甕棺墓の南約20cmに近接する。7号甕棺墓と同様に9号甕棺墓とも切り合いがあった様であるが、現況からは判断できない。互いに密接しながらも棺自体が切り合っていないため、意識的に近接して造られたものと考えられる。中央部を性格不明溝が棺体を破壊しながら通過している。また、胴部凸帯の下部に穿孔がなされ、墓墳の残存状況は長軸100cm、短軸75cmの不整楕円形を呈する。主軸方向はS-69°-Wを示し、傾斜角43°前後に埋置される。

9号甕棺墓 (第6図、図版6a)

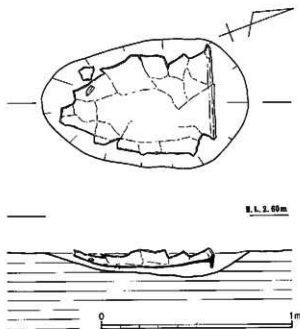
A群の中心部に位置する中型の甕棺で、8号甕棺墓と近接する。上半部欠損により蓋部の形態は不明。墓墳の残存状況は長軸79cm、短軸77cmの不整円形を呈する。主軸方向はN-55°-Wを示し、37°前後の傾斜角をもって埋置される。

10号甕棺墓 (第6図、図版6b)

A群の中心部やや東より、9号甕棺墓の東南約1.8mに位置する成人棺である。下甕の胴部付近が残るのみで大部分は欠損し、墓墳の残存状況は長軸85cm、短軸67cmの不整楕円形を呈する。主軸方向はN-10°-E前後を示しほぼ水平に埋置されたものと思われる。

11号甕棺墓 (第5図、図版3a)

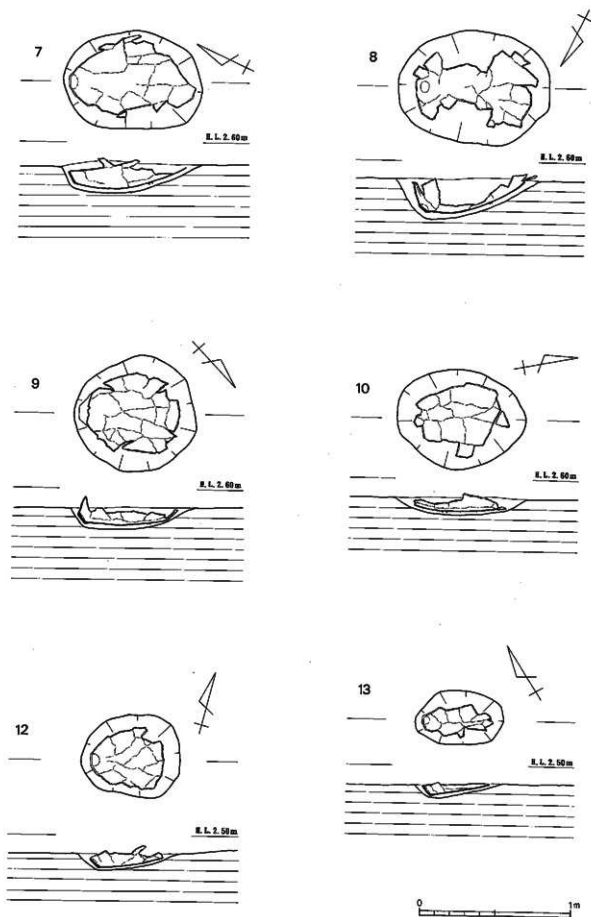
A群の北西部、中心部の北よりに位置し、60号甕棺墓の東1.7mに近接する成人棺で、下甕の埋置された状態での下半部を残す。墓墳の残存状況は長軸109cm、短軸68cmの不整楕円形を呈する。主軸方向はN-20°-Eを示し、ほぼ水平に埋置される。棺内より磨製石鐮1点、磨製石剣切先1点が出土。磨製石鐮の出土状態は明確にできなかったが、磨製石剣切先は棺壁に張り付いた状態で検出された。これらは副葬品というよりも、被害者を殺傷した武器が体内に残されていたものであろう。



第5図 11号甕棺墓実測図 (縮尺1/20)

12号甕棺墓 (第6図、図版6c)

A群の北西部、60号甕棺墓の北0.9mに位置する中型の甕棺で、下甕の胴部凸帯付近から底部までの一部が残存する。墓墳の残存状況は長軸66cm、短軸54cmの不整円形を呈する。主軸方向はN-75°-Eを示し、43°前後の傾斜角をもって埋置される。棺内埋土より管玉1点が出土。



第6图 7,8,9,10,12,13号墓棺墓室测图 (縮尺1/25)

13号甕棺墓（第6図、図版6d）

E群の南部隅に位置する。下甕の底部付近が残存するのみであるが、成人棺であると思われる。墓壇の残存状況は長軸58cm、短軸36cmの不整楕円形を呈する。主軸方向はS-64°-E前後を示し、40°前後の傾斜角をもって埋置される。

14号甕棺墓（第7図、図版6e）

E群の南部に位置する。下甕の底部付近が残存するのみであるが、成人棺であると思われる。墓壇の残存状況は長軸67cm、短軸61cmの不整円形を呈する。主軸方向はN-76°-E前後を示し、傾斜角22°前後に埋置される。

15号甕棺墓（第7図、図版6f）

E群の南西部隅に位置する成人棺である。下甕の胴部凸帯付近から底部までの一部を残存する。墓壇の残存状況は長軸83cm、短軸57cmの不整楕円形を呈する。主軸方向はS-82°-Wを示し、傾斜角は明確にできないが24°前後に埋置されたものと思われる。

16号甕棺墓（第7図、図版6g）

A群の東部隅、6号甕棺墓の東方3.3mに位置する。成人棺であると思われるが、胴部の一部を残存するのみで棺形を復元する事はできない。墓壇の残存状況は長軸55cm、短軸45cmの不整円形を呈し、主軸方位はN-83°-W周辺を示すものと思われる。

17号甕棺墓（第7図、図版6h）

B群の北西部に位置する日常土器を転用した棺で、18号甕棺墓の墓壇を切る。その大きさから乳幼児を埋葬したものと思われる。墓壇の残存状況は長軸55cm、短軸52cmの方角ぎみの不整円形を呈する。主軸方向はS-79°-Wを示し、43°の傾斜角をもって埋置される。

18号甕棺墓（第7図、図版6h）

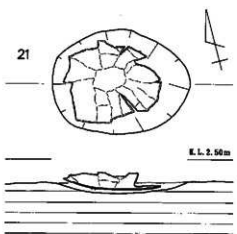
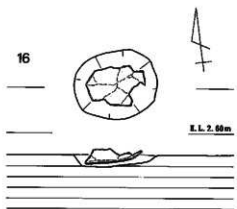
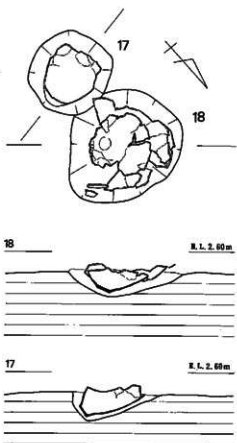
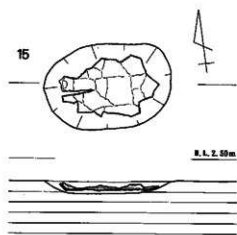
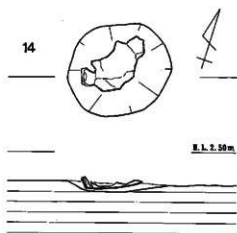
B群の北西部に位置する転用棺で、17号甕棺墓に墓壇の一部を切られる。17号甕棺墓と同様の理由により、乳幼児が埋葬されたものであると考える。下甕である壺の頸部より上の部分を欠損するため蓋部の構造は不明である。墓壇の残存状況は長軸82cm、短軸74cmの不整形を呈する。主軸方向はN-48°-Wを示し、65°の傾斜角をもって埋置される。

19号甕棺墓（第8図、図版7a）

B群の北西部に位置する大型棺であるが、攪乱を受け、墓壇内に須恵器や20号甕棺の一部が混入する。また墓壇内に残存する甕棺も型式の異なったものが2個体分あり、この2個体が対を成して甕棺墓として成立していたかどうかとも明確ではないが、下甕と推定される甕棺は主軸方向N-76°-Wを示し、ほぼ水平に残存する。

20号甕棺墓（第8図、図版7b）

B群の北西部に位置する大型棺であるが、19号甕棺墓とともに攪乱を受け、墓壇の一部を欠損し、下甕の口縁部も元位置を留めない。墓壇の残存状況は長軸116cm、短軸82cmの隅丸方形ぎみの不整楕円形を呈する。主軸方向はN-75°-Wを示し、10°の傾斜角をもって埋置される。



第7图 14,15,16,17,18,21号墓棺墓穴剖面图 (缩尺 1/25)

21号甕棺墓 (第7図、図版7c)

B群の北西部に位置する大型棺で、22号甕棺墓が北方0.5mに近接し、それと併設されていた感もある。下甕の胴部凸帯周辺から底部付近の一部が残存する。墓墳の残存状況は長軸90cm、短軸69cmの不整楕円形を呈する。主軸方向はN-75°-Wを示し、ほぼ水平に埋置される。

22号甕棺墓 (第8図、図版7d)

B群の北西部に位置する成人棺で21号甕棺墓と近接する。墓墳の残存状況は長軸76cm、短軸63cmの不整円形を呈する。主軸方向はS-87°-Eを示し、ほぼ水平に埋置される。

23号甕棺墓 (第8図、図版7e)

B群の西北部に位置する成人棺である。下甕の凸帯部周辺のみ残存するが垂直方向からの圧力によって棺体が破砕されている。墓墳の残存状況は長軸82cm、短軸53cmの隅丸方形ぎみの楕円形を呈する。主軸方向はN-80°-Eを示し、ほぼ水平に埋置されていたものと思われる。

24号甕棺墓 (第8図、図版7f)

C群の南西隅に位置する成人棺である。下甕の凸帯部周辺から底部までの一部が残存する。墓墳の残存状況は長軸85cm、短軸71cmの不整楕円形を呈する。主軸方向はN-44°-Eを示し、44°の傾斜角をもって埋置される。

25号甕棺墓 (第8図、図版7g)

E群の西部に位置し、北西部の緩斜面に臨接する。成人棺であると思われるが、底部周辺の一部が残存するのみで、垂直方向の圧力によって破砕されている。墓墳の残存状況は長軸71cm、短軸51cmの不整形を呈する。主軸方向はS-86°-Eを示し、傾斜角は不明であるが、胴部付近はほぼ水平に残されている。

26号甕棺墓 (第9図、図版7h)

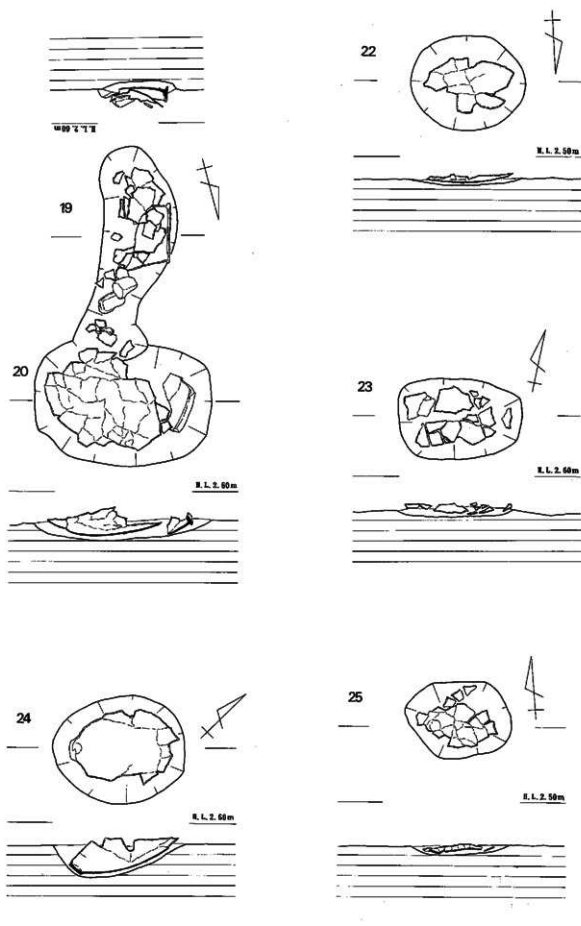
B群の南東部に位置する成人棺である。下甕の胴部凸帯周辺から底部までの一部が残存する。墓墳の残存状況は長軸96cm、短軸65cmの不整楕円形を呈する。主軸方向はN-66°-Eを示し、26°の傾斜角をもって埋置される。

27号甕棺墓 (第9図、図版8a)

B群の中心部付近に位置する。胴部付近の一部分を残すのみであるが、成人棺であると思われる。28号甕棺墓が北0.7mに隣接し、主軸線も平行に近い。新旧関係は不明であるが、どちらか一方を意識して造られたものと思われる。墓墳の残存状況は長軸67cm、短軸62cmの不整円形を呈する。主軸方向はN-72°-E付近を示すものと思われる。傾斜角は判断できない。

28号甕棺墓 (第9図、図版8b)

B群の中心部付近に位置する成人棺で、27号甕棺墓が南0.7mに隣接し、それと対を成すものとする。胴部凸帯周辺が残存するのみであり、墓墳の残存状況は長軸85cm、短軸57cmの不整楕円形を呈する。主軸方向はN-81°-Eを示し、ほぼ水平に埋置されていたものと思われる。



第8図 19,20,22,23,24,25号窆棺墓実測図 (縮尺 1/25)

29号甕棺墓 (第9図、図版8c)

B群の中心部付近に位置する成人棺で、下甕と思われるもの胸部凸帯周辺の一部が残存するのみである。30号甕棺墓と近接し、切り合いがあるものと思われるが確認できなかった。墓墳の残存状況は長軸81cm、短軸68cmの不整円形を呈する。主軸方向はN-35°-E前後を示し、ほぼ水平に埋置されていたものと思われる。

30号甕棺墓 (第9図、図版8d)

B群の中心部付近に位置し、29号甕棺墓と近接するが切り合い関係は確認できなかった。合口式の成人棺で、上甕に大型の鉢形土器を用いる。墓墳の残存状況は長軸136cm、短軸82cmの不整楕円形を呈する。主軸方向はN-67°-Eを示し、ほぼ水平、もしくは若干マイナスにふれた傾斜角で埋置される。

31号甕棺墓 (第9図、図版8e)

B群の中心部付近の西よりに位置する成人棺で、下甕の口縁部から底部までの約半分が残存する。墓墳の残存状況は長軸121cm、短軸86cmの不整楕円形を呈する。主軸方向はN-8°-Wを示し、この群の中では唯一、北方に主軸を向ける甕棺墓である。22°の傾斜角をもって埋置される。

32号甕棺墓 (第11図、図版8f)

C群の中心部に位置する成人棺で、下甕の胸部凸帯周辺から底部までの一部を残存する。墓墳の残存状況は長軸96cm、短軸76cmの不整楕円形を呈する。主軸方向はN-83°-Eを示し、48°の傾斜角度をもって埋置される。棺内より管玉3点が出土。

33号甕棺墓 (第11図、図版8g)

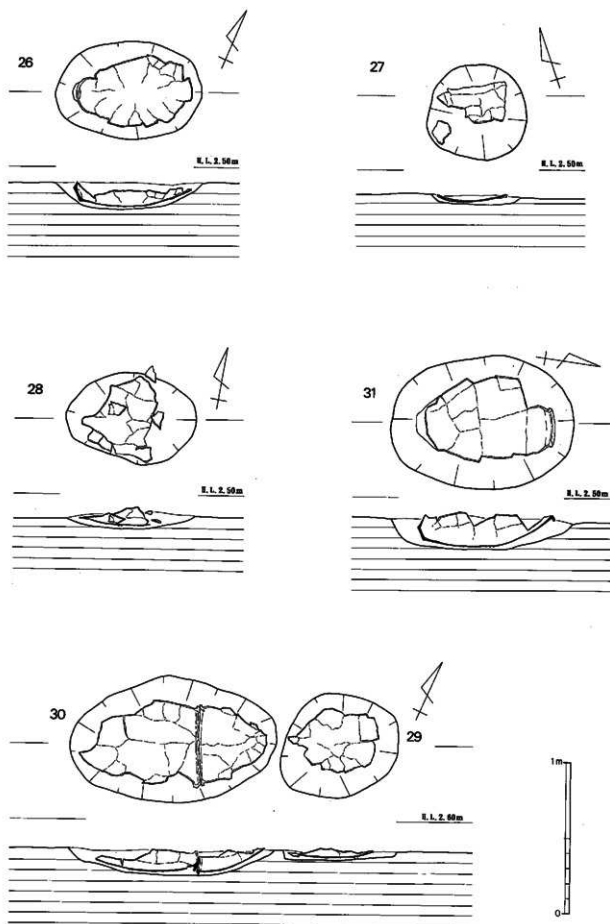
C群の中心部に位置する成人棺で、34号甕棺墓が北東0.4mに近接する。下甕の胸部凸帯周辺を残存するのみである。墓墳の残存状況は長軸61cm、短軸54cmの不整円形を呈する。主軸方向はN-90°-Eを示し、35°の傾斜角をもって埋置されていたものと思われる。棺内より管玉1点が出土。

34号甕棺墓 (第11図、図版8h)

C群の中心部、33、35号甕棺墓のほぼ中間に位置する壺形土器を用いた転用棺であり、棺の大きさから乳幼児を埋葬したものと思われる。主軸方向に規則性はみられないが、2基の成人用甕棺墓に挟まれたような状態に乳幼児棺が位置している。下甕の頸部より上部が欠損し、墓墳の残存状況は長軸64cm、短軸60cmの不整円形を呈する。主軸方向はS-22°-Eを示し、64°の傾斜角をもって埋置される。

35号甕棺墓 (第11図、図版9a)

C群の中心部に位置する成人棺で、南0.8mに34号甕棺墓が近接する。下甕の胸部凸帯周辺から底部までが残存し、墓墳の残存状況は長軸107cm、短軸85cmの不整楕円形を呈する。主軸方向はS-50°-Wを示し、32°の傾斜角をもって埋置される。棺内より管玉2点が出土。これら33、34、35号甕棺墓の3基、或いは32号甕棺墓を含んだ4基の甕棺墓は小群を形成しており、

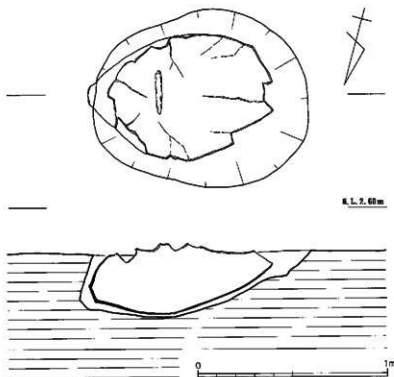


第9圖 26,27,28,29,30,31号變棺墓與測圖 (縮尺 1/25)

被葬者間には何らかの関連性があるものと思われる。

37号甕棺墓(第10図、図版3b)

B群の北東部隅に位置する成人棺で、下甕の頭部直下から底部までが残る。墓壇の残存状況は長軸113cm、短軸94cmの不整楕円形を呈する。主軸方向はS-76°-Wを示し、27°の傾斜角をもって埋置される。この墓群の中では唯一の、武器が副葬された墓であり、棺内からはほぼ完形の磨製石剣1点が出土した。これは被葬者の腹部付近に供えられていたものと考えられ、棺の主軸方向に直交する角度でほぼ



第10図 37号甕棺墓実測図 (縮尺1/20)

水平の傾斜角をもって検出された。また、その出土状況からは、埋葬直後から棺内へ大量の砂が流入していた事が伺える。上部構造の有無は不明であるが、周囲6m以内には他の墓は存在せず、小規模ながら空間的区画性、或いは空間的隔絶性を意識した墓であるとも考えられる。

38号甕棺墓(第11図、図版9b)

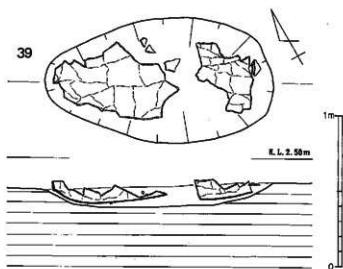
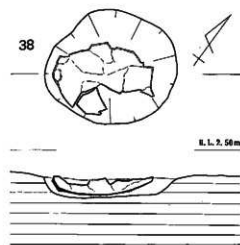
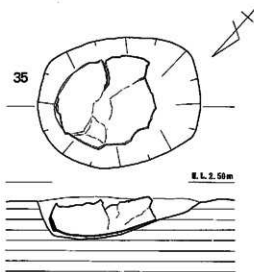
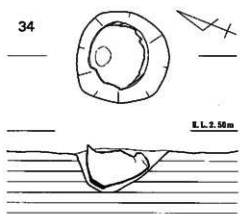
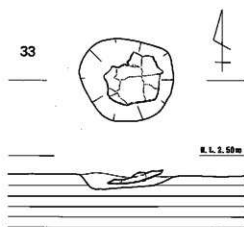
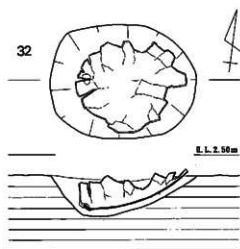
C群の東部隅に位置する成人棺であり、上半部が欠損する。墓壇の残存状況は長軸86cm、短軸76cmの不整楕円形を呈する。主軸方向はN-35°-Eを示し、34°の傾斜角をもって埋置される。

39号甕棺墓(第11図、図版9c)

D群の南東部隅に位置する成人棺で、40号甕棺墓が北西0.2mに近接する。上甕の胴部が残るが、合口部が攪乱を受ける。墓壇の残存状況は長軸150cm、短軸83cmの不整楕円形を呈する。主軸方向はS-61°-Eを示し、ほぼ水平に埋置される。

40号甕棺墓(第13図、図版9d)

39号甕棺墓に隣接する成人棺である。合口部が残されているかと思われたが、下甕がずれ落ちたものであった。墓壇の残存状況は長軸101cm、短軸78cmの不整楕円形を呈する。主軸方向はN-75°-Eを示し、30°程度の傾斜角をもって埋置される。



第11圖 32,33,34,35,38,39号瘞棺墓実測図 (縮尺 1/25)

41号甕棺墓（第13図、図版9e）

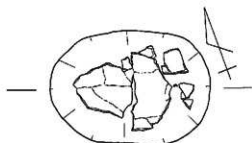
D群の東部に位置する合口式の成人棺である。上甕、下甕ともに大半を欠損する。上下の判別が困難であるが、低位にある東側の棺を下甕とした。墓墳の残存状況は長軸119cm、短軸59cmの不整楕円形を呈する。主軸方位はN-86°-Wを示し、ほぼ水平に埋置される。

42号甕棺墓（第13図、図版9f）

43、44号甕棺墓とともにD群の中心を成す中型の甕棺である。北2.3mに43号甕棺墓が近接する。下甕の胴部周辺が残存。墓墳の残存状況は長軸75cm、短軸72cmの不整円形を呈する。主軸方位はS-87°-Eを示し、傾斜角は不明であるが10°程度の緩い角度で埋置される。棺内から管玉3点が出土。

43号甕棺墓（第12図、図版4）

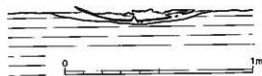
D群の中心を成す3基の甕棺墓の中央に位置する成人棺である。北0.9mに44号甕棺墓が南2.3mに42号甕棺墓が近接する。大半を欠損するが、下甕の胴上半部付近から硬玉製勾玉1点が出土。墓墳の残存状況は長軸84cm、短軸60cmの楕円形を呈する。主軸方位はS-71°-Eを示し、20°以下の緩い傾斜で埋置されていたようである。



全長 2.50m

44号甕棺墓（第13図、図版9g）

43号甕棺墓の南0.9mに位置する転用棺であり、棺の大きさから乳幼児を埋葬したものと思われる。頸部から上を打ち割った壺形土器を下甕とし、口縁部下に2条の三角凸帯をもつ鉢形土器を上甕とする。上甕は口縁部付近しか残っていないかったが、その下には上甕を安定させるために置かれたと思われる粘土塊が検出された。墓墳の残存状況は長軸86cm、短軸77cmの不整円形を呈する。主軸方向はN-86°-Wを示し、33°の傾斜角をもって埋置される。棺内から管玉8点が出土。



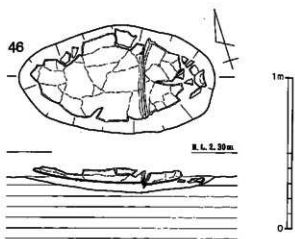
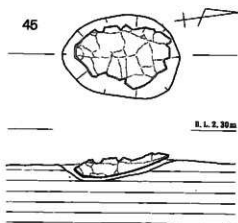
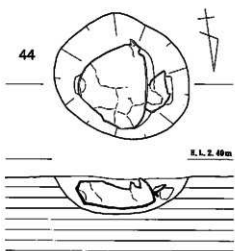
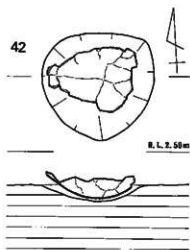
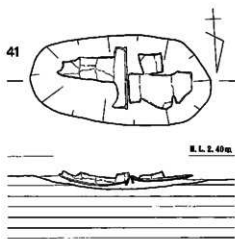
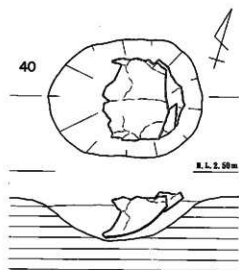
第12図 43号甕棺墓実測図（縮尺1/20）

45号甕棺墓（第13図、図版9h）

D群の北部に位置する成人棺であり、上半部を欠損する。墓墳の残存状況は長軸78cm、短軸55cmの不整楕円形を呈する。主軸方位はN-7°-Eを示し、42°の傾斜角をもって埋置される。

46号甕棺墓（第13図、図版10a）

D群の北部に位置する合口式の成人棺である。上甕には大型の鉢形土器を用いる。墓墳の残存状況は長軸129cm、短軸72cmの不整楕円形を呈する。主軸方位はS-73°-Eを示し、ほぼ水平に埋置される。



第13图 40,41,42,44,45,46号突棺墓实测图 (縮尺 1/25)

48号変棺墓（第14図、図版10b）

B群の中心部東よりに位置する中型の変棺であり、棺の大きさから小児を埋葬したものと
思われる。墓墳の残存状況は長軸60cm、短軸58cmの不整円形を呈する。主軸方向はS-66°-Wを
示し、50°の傾斜角をもって埋置される。

49号変棺墓（第14図、図版10c）

B群の中心部東よりに位置する合口式の成人棺である。上半部を欠損する。棺内は攪乱を受
けており、下甕の底部付近は引き抜かれている。墓墳の残存状況は長軸150cm、短軸71cmの不
整楕円形を呈する。主軸方向はN-90°-Wを示し、5°程度の傾斜角をもって埋置される。

50号変棺墓（第14図、図版10d）

B群の北東部に位置する成人棺である。上半部を欠損し、底部付近を攪乱によって失う。墓
墳の残存状況は長軸推定85cm、短軸55cmの不整楕円形を呈する。主軸方向はS-9°-Eを示し9°程
度の傾斜角をもって埋置される。

51号変棺墓（第14図、図版10e）

B群の北東部に位置する成人棺であり、上半部を欠損する。墓墳の残存状況は長軸66cm、短
軸51cmの不整楕円形を呈する。主軸方向はS-88°-Wを示し、34°程度の傾斜角をもって埋置さ
れる。

52号変棺墓（第14図、図版10f）

B群の南部に位置する成人棺であり、19号変棺墓が南東1.5mに近接する。上半部と下甕の
口縁部と底部周辺を欠損する。墓墳の残存状況は長軸74cm、短軸71cmの不整円形を呈する。
主軸方位はN-77°-E付近を示すものと思われる。

54号変棺墓（第14図）

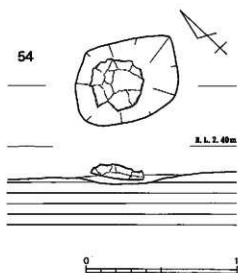
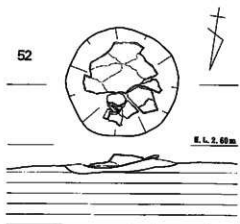
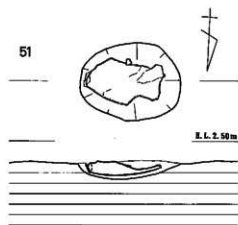
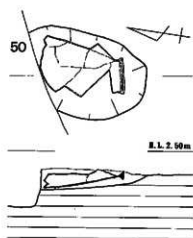
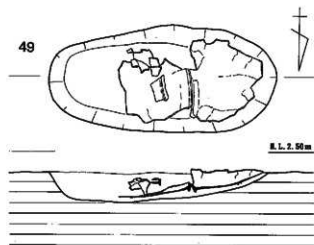
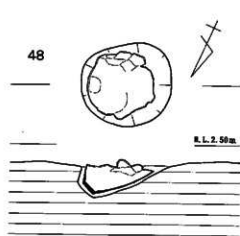
E群の北端部に位置する成人棺であるが、下甕の胴部の一部を残すのみである。墓墳の残存
状況は長軸68cm、短軸55cmの不整形を呈する。主軸方位はN-45°-W付近を示すものと思われ
る。

59号変棺墓（第15図、図版10g）

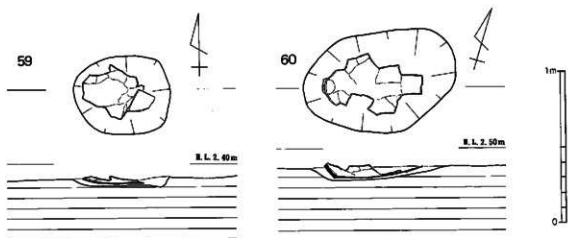
C群の北部に位置する成人棺であるが大半を欠損し、下甕の胴部付近が残るのみである。墓
墳の残存状況は長軸63cm、短軸51cmの不整円形を呈する。墓墳の残存状況は長軸63cm、短軸
52cmの不整円形を呈する。主軸方位はN-101°-E付近を示し、ほぼ水平に埋置されていたもの
と思われる。

60号変棺墓（第15図、図版10h）

A群の北西部に位置する成人棺であり、12号変棺墓が北0.9mに近接する。上半部を欠損す
る。墓墳の残存状況は長軸102cm、短軸67cmの不整楕円形を呈する。主軸方位はN-73°-Eを示
し、36°の傾斜角をもって埋置される。12号変棺墓と、ほぼ主軸線を平行にして並列関係にあ
り、小群を形成するものである。



第14图 48,49,50,51,52,54号竖棺墓实测图 (缩尺 1/25)



第15図 59,60号変棺墓実測図 (縮尺 1/25)

表1 変棺墓一覧表

変棺 番号	主軸方位	傾斜角	備 考	変棺 番号	主軸方位	傾斜角	備 考
K 1	S-10°-E	ほぼ水平	上壁は鉢形土器	K28	N-81°-E	ほぼ水平	
2	N-14°-W	ほぼ水平	中型棺	29	N-35°-E	ほぼ水平	
3	S-80°-W	45°	中型棺	30	N-67°-E	ほぼ水平	
4	S-7°-E	ほぼ水平	転用棺	31	N-8°-W	22°	
5	S-73°-W	37°		32	N-83°-E	48°	管玉 3
6	S-85°-W	15°		33	N-90°-E	35°	管玉 1
7	S-25°-E	26°		34	S-22°-E	64°	転用棺
8	S-69°-W	43°		35	S-50°-W	32°	管玉 2
9	N-55°-W	37°	丸みを帯びた中型棺	37	S-76°-W	27°	磨製石剣 1
10	N-10°-E	ほぼ水平		38	N-35°-E	34°	
11	N-20°-E	ほぼ水平	磨製石剣1, 磨製石剣切先1	39	S-61°-E	ほぼ水平	
12	N-75°-E	43°	丸みを帯びた中型棺 管玉 1	40	N-75°-E	30°	
13	S-64°-E	40°		41	N-86°-W	ほぼ水平	
14	N-76°-E	22°		42	S-87°-E	10°	丸みを帯びた中型棺 管玉 3
15	S-82°-W	24°		43	S-71°-E	20°以下	硬玉製勾玉 1
16	N-63°-W	—		44	N-86°-W	33°	転用棺 管玉 8
17	S-79°-W	43°	転用棺	45	N-7°-E	42°	
18	N-48°-W	65°	転用棺	46	S-73°-E	ほぼ水平	
19	N-76°-W	—		48	S-66°-W	50°	丸みを帯びた中型棺
20	N-75°-W	10°		49	N-90°-W	5°	
21	N-75°-W	ほぼ水平		50	S-9°-E	9°	
22	S-87°-E	ほぼ水平		51	S-88°-W	34°	
23	N-80°-E	ほぼ水平		52	N-77°-E	—	
24	N-44°-E	44°		54	N-45°-W	—	
25	S-86°-E	—		59	S-101°-E	ほぼ水平	
26	N-66°-E	26°		60	N-73°-E	36°	
27	N-72°-E	—					

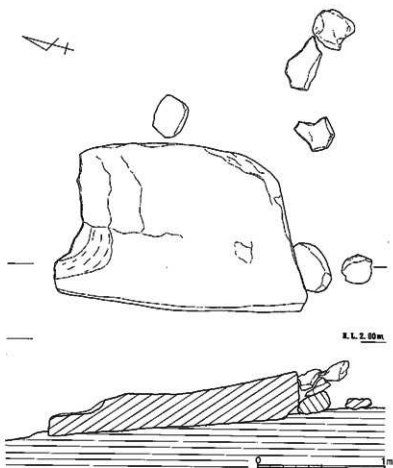
2) 大 石 (第16-19図、図版11
a~c)

調査区の東、西、北辺は緩斜面を成しており、後世の削平によって破壊された遺構に伴う遺物が廃棄され、土器溜りとなっていた。遺物の時期は、弥生時代早期から中世にわたっているが、その大半は弥生時代中期の甕棺墓群に伴う大型の甕棺、あるいは棺として転用された日常土器であり、墓の墓場といった感であった。

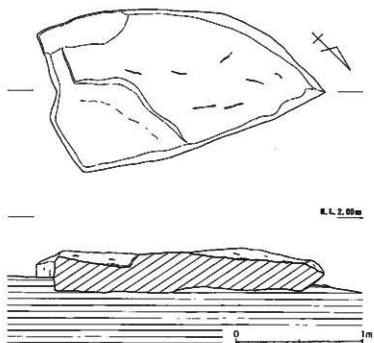
また、土器溜りに包含された遺物は、調査区の北辺に集中する傾向があったが、その地点で4基の大石が検出された。いずれも長さ幅に対して厚さが偏平なもので、その周囲には支石墓の支石を思わせる人頭大の石が散在していた。

中でも3号大石の下にはその人頭大の石が完全に食い込んでおり、支石墓と考えてもおかしくない状態であったが、大石が検出された地点の標高は2.0m以下であり、周囲の状況からみても元位置を保っているとは考えられないので、周辺の甕棺と同様に、破壊され廃棄された支石墓、或いは甕棺墓の標石であると判断した。また念の為、重機によって大石を吊り上げ、下部構造の無い事を確認した。

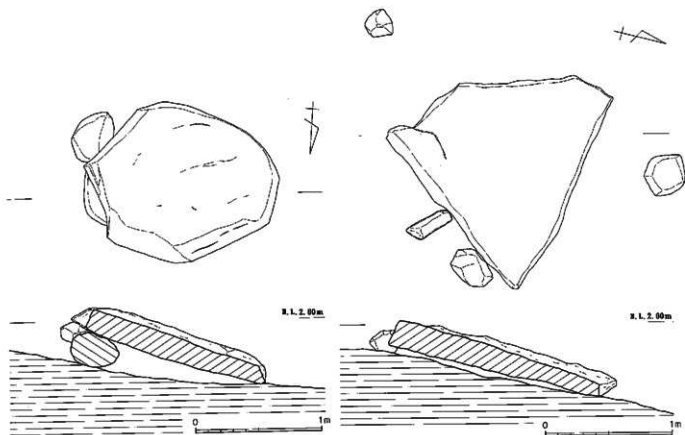
なお、検出された大石は持ち帰り、現在、町内の曲り田スポーツ公園内に保存、活用している。



第16図 1号大石実測図 (縮尺 1/30)



第17図 2号大石実測図 (縮尺 1/30)

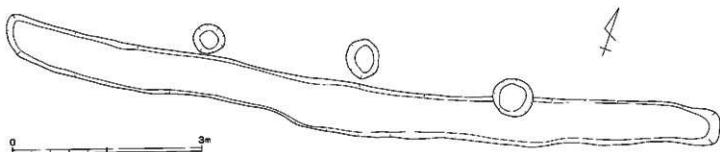


第18図 3号大石実測図 (縮尺 1/30)

第19図 4号大石実測図 (縮尺 1/30)

3) 溝状遺構 (第20図)

調査区の北西城において溝状遺構が1基検出された。長さ11.52m、最大幅0.7m、深さ約0.1mを測り、南部を土壇状の遺構に切られる。埋土は淡褐色の砂質土である。少量の弥生土器と中近世土器の小片を含むのみであり、遺物により遺構の時期を判断することはできないが、少なくとも弥生時代の甕棺墓群に伴うものではないと考える。

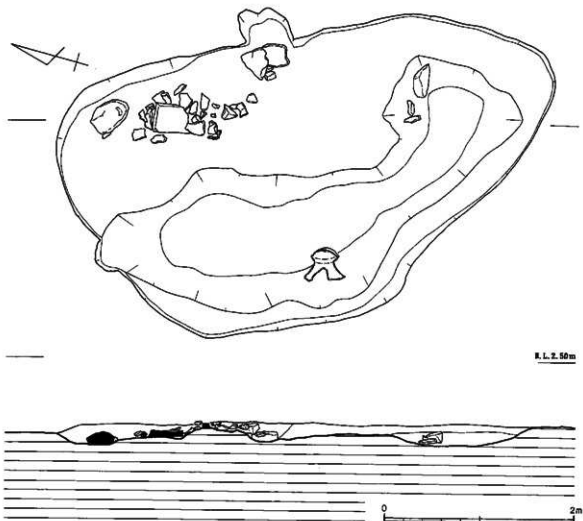


第20図 溝状遺構平面実測図 (縮尺 1/60)

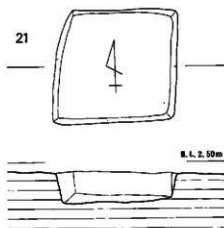
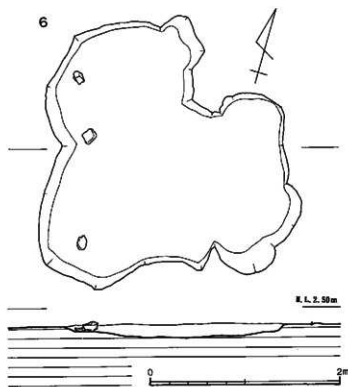
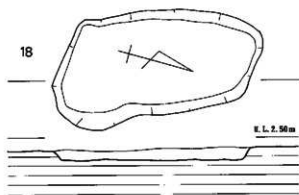
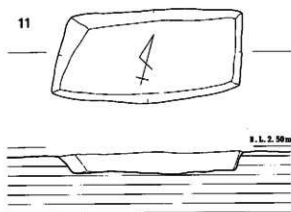
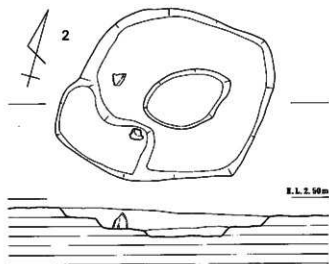
4) 土 墳 (第21、22、23図、図版11f)

調査区内において30数基の土墳が検出されたが、その殆どが雑多な時期の遺物を含んでおり、時期の限定できる土墳は少ない。ここでは13基の土墳のみを図示した。

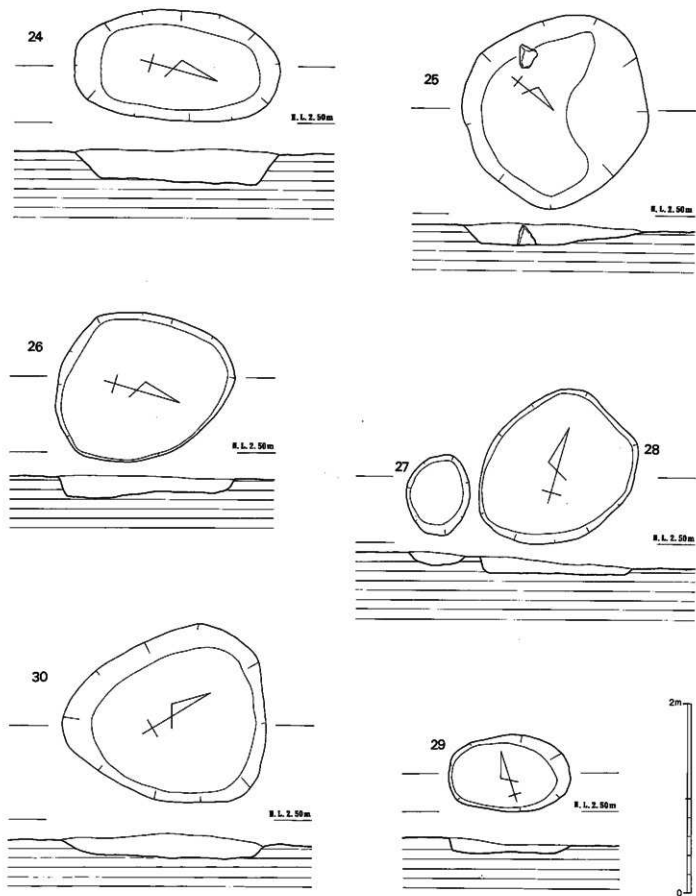
SK-23は、長軸5.3m、短軸3.1mの不整形を呈する。複数の土墳が切り合っているようであるが、調査時点では確認できなかった。外側の掘込みからは人頭大の石や粉碎された石が集中して検出されたが、その性格は不明である。内側の掘込みの中からは弥生時代中期の祭祀土器が出土。SK-6は弥生時代中期の土器片を包含する不整形の土墳であり、長軸3.6m、短軸1.6mを測る。SK-11,18,21は土墳墓或いは木棺墓の類いである可能性があるが、甕棺墓群に伴うものではないものと考える。また、調査区の東北部に検出されたSK-24～SK-30からは主に中世土器の小片が出土し、埋土は明灰色のやや粘りのある砂質土であった。中世墓である可能性もある。



第21図 23号土墳実測図 (縮尺 1/40)



第22图 2,6,11,18,21号土坑实测图 (缩尺 1/40)



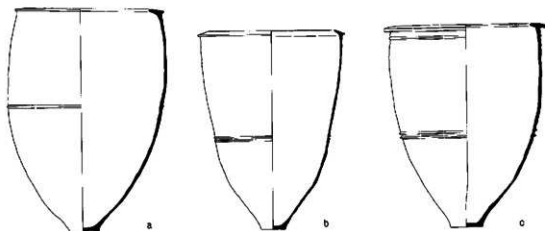
第23图 24,25,26,27,28,29,30号土坑夹测图 (缩尺 1/40)

3. 遺物

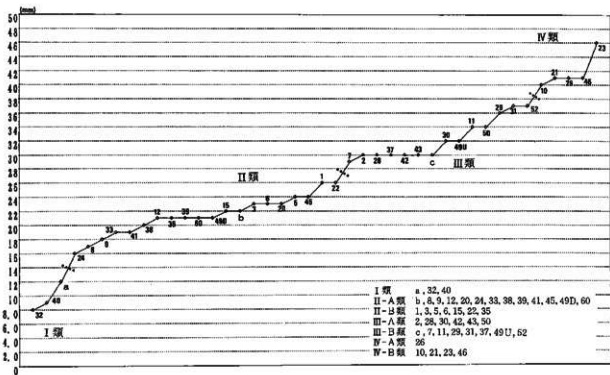
1) 甕棺

前記したように、後世の削平などによって甕棺墓は大きなダメージを受けており、完全な形で図化できるものは数える程しかなかった。大部分が口縁部、或いは底部を完全に失っており、特に底部を失ったものの中には、口縁部の傾き設定の違いによって誤ったイメージを与えるものもあると思われる。また、胴部しか残らず径が不明なものもあえて、径、傾きを推定によって図面上で復元した。また、甕棺墓の時期であるが、出土した甕棺の型式は橋口綱年によるK II b式～K III a式の範疇に収まるものではある。しかしながら、その大半が分類に必要な情報量に欠ける残存状況である為、ここでは総括して中期前半とし、胴部凸帯の形状により I 類から IV 類に分類する事とする。

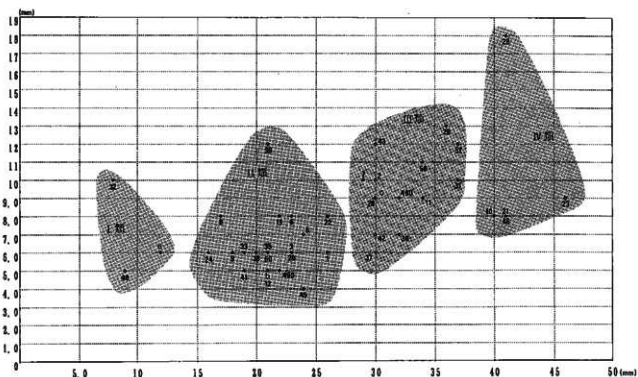
第25図は胴部凸帯の幅（二条凸帯の場合は2本分）の偏差を示すものであり、aとK24、K22とK7、K52とK10の間に若干大きな偏差が見られ、これにより大きく4つに分類される。I類は1条凸帯のもの、II～IV類は二条凸帯のもので、凸帯の幅が16mm～26mm程度のもの（II類）、29mm～37mmのもの（III類）、40mm以上のもの（IV類）で、さらに凸帯間に直線的な面がないもの（A）と、凸帯間に直線的な面があるもの（B）の2者に区分される。また、包含層より出土したa、b、cはこの甕棺墓群の時期幅と型式の変遷を示す典型であるが、それらがそれぞれI類からIII類に属するので、多少のばらつきはあるものの、概ねI類からIII類へと凸帯の型式が変移したものである事が伺える。また、第26図は胴部凸帯の幅と凸帯の長さ（2条のものは最大値）の関係を示すものであり、II類の中でII-b類の分散はIII類以上に片寄っており、時期差は確定できないものの、II類の中で、B類はA類よりも新しい傾向を示す事を表している。このことにより胴部凸帯の変移は、I類→II-A類→II-B類→III類といった順序であることが分かる。なお、IV類はIII類よりも新しい傾向を示すものの、時期差は確定できない。



第24図 甕棺墓群の時期幅を示す甕棺



第25図 鰓部凸帯幅の偏差



第26図 鰓部凸帯幅と長さの関係

以下に各甕棺の詳細を記す。

1号甕棺上甕（第27図、図版12a）

復元口径60.4cmを測る大型の鉢形土器である。T字状の口縁はあまり発達せず小さく外傾し、端部に刻みが入る。器面調整は、口縁部内外面と凸帯周辺はヨコナデであるほかは全体的にナデで仕上げるが、外面胴中央部に荒いハケ目残り、内面底部付近に僅かにハケ目残る。胎土は小砂粒を若干含み、焼成は良好である。色調は内外面ともに暗赤褐色を呈する。

1号甕棺下甕（第27図、図版12a）

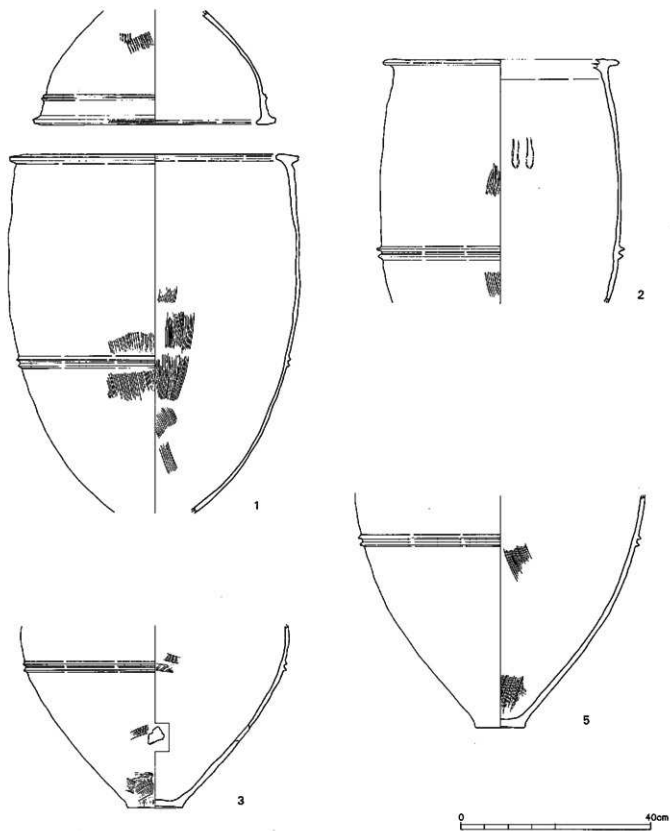
あまり発達しないT字状の口縁をもち、胴部に2条の三角凸帯が巡る復元口径60.3cmを測る大型の甕棺である。口縁部上端から胴部凸帯中央までの長さは44.5cmを測る。外面の口縁部付近を除き全体的に黒色顔料が塗布されていた模様であり、内面胴部上半に直径20cm程の黒斑がある。器面調整は、口縁部内外面と胴部凸帯周辺がヨコナデのほかは内外面ともにナデで仕上げるが、外面胴部凸帯周辺と、内面胴部から底部付近にかけて荒いハケ目残る。胎土は小砂粒を含み、口縁部付近の焼成はあまく、器質も軟質であるが、胴部から底部付近にかけての焼成はやや良好である。色調は、内外面ともに橙褐色を呈する。

2号甕棺（第27図、図版12b）

復元口径50.0cmの中型の甕棺で、口縁部上端から胴部凸帯中央までの長さは41.2cmを測る。胴下半部より下の部位が欠損する。胴部にやや丸みをもった2条の三角凸帯が巡り、口縁は内側が欠損するが、T字状を呈し端部は丸くおさめられる。明瞭ではないが、外面全体に黒色顔料が塗布されていた可能性がある。器面調整は、口縁部の内外面と胴部凸帯周辺がヨコナデのほかは内外面ともにナデで仕上げるが、外面は部分的にやや荒い日のハケ目残る。また、内面胴部上半部にはユビオサエの痕跡が残される。胎土は小砂粒を多く含み、焼成はやや良好。色調は外面は暗橙褐色、内面は淡橙褐色を呈する。

3号甕棺（第27図、図版12c）

胴部に2条の三角凸帯が巡り、やや上げ底ぎみの底部をもつ、底径11.4cmを測る中型の甕棺である。胴部凸帯中央から底部までの長さは29.8cmを測る。胴上半部より上を欠損する。胴部下半中央部に外側からの穿孔が施され、底面を含む外面全体に黒色顔料が塗布されている。器面調整は、胴部凸帯周辺にヨコナデのほか内外面ともにナデで仕上げるが、外面胴下半部から底部にかけての部位と、胴部凸帯裏面にやや荒いハケ目が残される。胎土は石英砂、小砂粒を少量含むが精良である。また焼成は良好であるが、器質はやや軟質である。色調は外面は淡橙褐色、内面は橙褐色を呈する。



第27图 1,2,3,5号甗棺实剖图 (缩尺1/8)

5号甕棺 (第27図、図版12d)

大型の甕棺で胴部に2条の三角凸帯が巡り、底部は若干上げ底で径10.4cmを測る。胴部上半から上の部位を欠損し、胴部凸帯中央から底部までの長さは40.0cmを測る。器面調整は胴部凸帯周辺がヨコナデのほかは、外面は丁寧なナデで仕上げられるが、内面は細かいハケ目が部分的に残る。胎土は小砂粒を多く含むが緻密で、焼成は良好である。色調は、外面は橙褐色、内面は淡橙褐色を呈する。

6号甕棺 (第28図、図版12e)

復元口径69.3cmを測る大型の甕棺で、胴部に2条の三角凸帯が巡り、あまり発達しないT字状の口縁をもつ。底部周辺は欠損。胴部形状は全体的に丸みを帯びる。口縁部上端から胴部凸帯中央までの長さは44.0cmを測る。口縁部を除き、外面全体に黒色顔料が塗布される。器面調整は、口縁部と胴部凸帯周辺はヨコナデされるほか、全体的にナデで仕上げるが、内面胴部中央部に細かいハケ目が残る。胎土は小砂粒を多く含み、焼成は良好である。色調は内外面ともに明橙褐色を呈する。

7号甕棺 (第28図、図版13a)

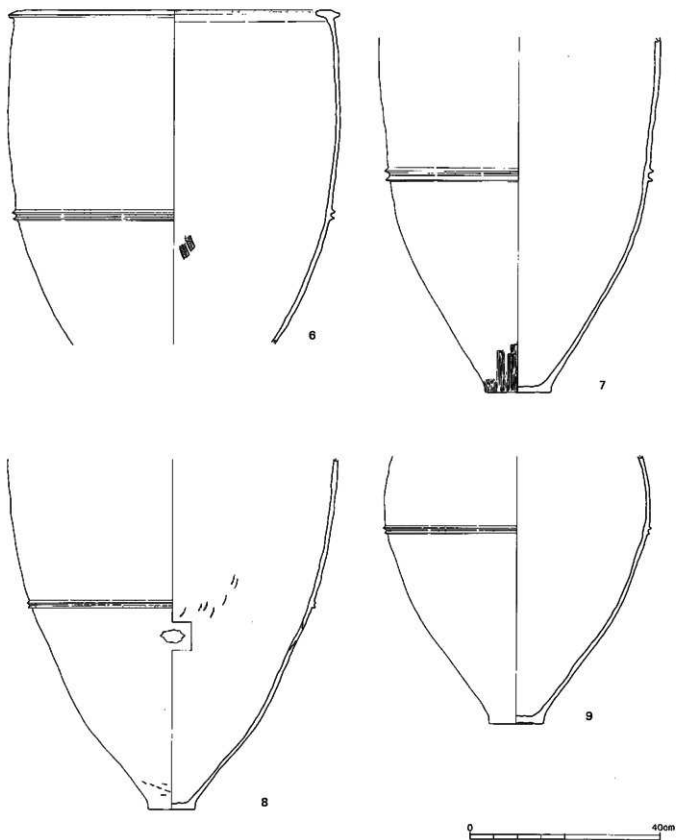
大型の甕棺で、胴部に2条の三角凸帯をもち、平底の底部は径13.8cmを測る。口縁部周辺は欠損するが、胴上半は垂直的に立ち上がり、胴部凸帯中央から底部までの長さは46.6cmを測る。外面全体に黒色顔料が塗布され、外面底部付近に10cm程の黒斑がある。器面調整は胴部凸帯周辺がヨコナデのほか、全体的にナデで仕上げられるが、外面底部付近に細かいハケ目が残る。胎土は小砂粒を若干含むのみであるが、焼成があまりよく、器質はやや軟質である。色調は内外面ともに橙褐色を呈する。

8号甕棺 (第28図、図版13b)

大型の甕棺で、胴部に小さな2条の三角凸帯をもち、底径は10.0cmに復元される。口縁部周辺は欠損し、胴部凸帯中央から底部までの長さは44.0cmを測る。胴部凸帯の下に外側からの穿孔が施され、外面胴部上半部に黒斑がある。器面調整は胴部凸帯周辺がヨコナデのほか、全体的にナデで仕上げられるが、外面底部付近と、胴部凸帯裏面にはハケ目の痕跡が残される。胎土は砂粒を多く含み、やや焼成があまりよく、器質は軟質である。色調は外面赤褐色、内面黄褐色。

9号甕棺 (第28図、図版13c)

胴部上半が丸味を帯びた中型の甕棺である。上げ底の底部は径10.6cmを測る。口縁部周辺は欠損し、胴部凸帯中央から底部までの長さは41.4cmを測る。外面全体に黒色顔料が塗布され、内面には部分的に赤色顔料が確認される。器面調整は胴部凸帯周辺がヨコナデのほか、全体的にナデで仕上げられるが、内面は剝離が著しく不明である。胎土は小砂粒を多く含み、焼



第28圖 6,7,8,9号甕棺実測図 (縮尺1/8)

成は不良、器質は軟質であり、持ち上げると大きさに比して軽い印象を受ける。色調は外面淡黄褐色、内面淡橙褐色を呈する。

10号甕棺（第29図、図版13d）

胴部に2条の三角凸帯をもつ大型の甕棺であるが、口縁部と底部を欠損し、径は復元できないため推定により図化した。胴部の2条の三角凸帯は、個々の凸帯が互いに離れて独立しており、形も大きさも不揃いである。胴部形状は全体的に丸みをもつ。器面調整は、外面は胴部凸帯部周辺がヨコナデのほかはナデで仕上げられるが、内面は全体的に目の細かいハケ目が残され、ナデ仕上げは施されていない。胎土は小砂粒を少量含み、焼成は良好である。色調は外面赤褐色、内面黄褐色を呈する。

11号甕棺（第29図、図版13e）

復元口径70.0cmを測る大型の甕棺で、小さく外傾するT字状の口縁をもち、胴部に2条の三角凸帯が巡る。底部周辺を欠損するが、胴部の形状は全体的に丸みをもつ。口縁部上端から胴部凸帯中央までの長さは46.2cmを測る。外面胴部凸帯付近に薄い黒斑があり、器面調整は口縁部と胴部凸帯周辺がヨコナデのほかは、全体的にナデ仕上げされる。胎土は小砂粒を多く含み、焼成は良好である。色調は外面は淡赤褐色、内面は赤褐色を呈する。

12号甕棺（第29図、図版13f）

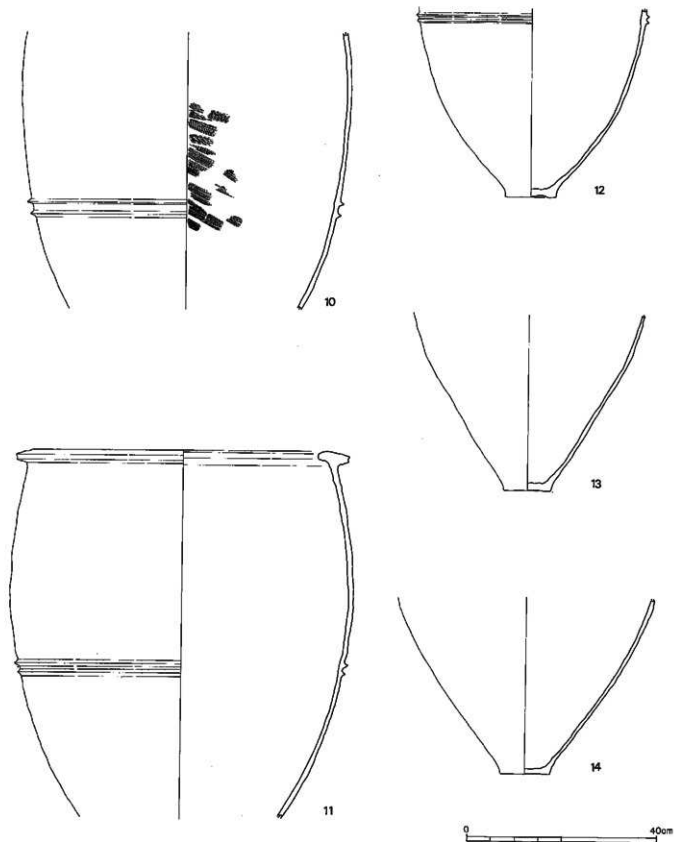
底径10.8cmの上げ底ぎみの底部をもち、胴部に2条の三角凸帯が巡る中型の甕棺である。胴上半部を欠損するが、丸みを帯びて口縁部がすばまる形態をもつものと思われる。胴部凸帯中央から底部までの長さは38.1cmを測る。外面に黒色顔料が塗布され、内面底部に黒斑がある。器面調整は、凸帯周辺がヨコナデのほかはナデで仕上げられる。胎土には小砂粒と1mm程度の赤色粒を僅かに含み、焼成は良好である。色調は、外面は暗赤褐色、内面は淡黄褐色を呈する。

13号甕棺（第29図、図版14b）

胴下半部から底部までを残すのみであるが、大型の甕棺であると思われる。底径は10.1cmに復元され、僅かに上げ底ぎみである。器面調整は全体的にナデで仕上げられる。胎土は小砂粒を僅かに含み、焼成は良好である。色調は、外面は橙褐色、内面は淡黄褐色を呈する。

14号甕棺（第29図、図版14c）

胴下半部から底部までを残すのみであるが、大型の甕棺であると思われる。底径は10.8cmに復元される。外面に黒色顔料が塗布され、底面から胴下半部中央にかけて黒斑が残る。器面調整は全体的にナデで仕上げられる。胎土は小砂粒を若干含み、焼成は良好である。色調は、外面は淡橙褐色、内面は淡白褐色を呈する。



第29图 10,11,12,13,14号甬钟实测图 (縮尺1/8)

15号壺棺 (第30図、図版14d)

胴部に2条の三角凸帯が巡る大型の甕棺である。底部は中心部を欠損するが径は11.8cmに復元され、やや上げ底を呈するものと思われる。胴部上半を欠損するが、やや外湾ぎみに立ち上がるものと思われる。胴部凸帯中央から底部までの高さは48.2cmを測り、外面全体に黒色顔料が塗布される。器面調整は胴部凸帯周辺がヨコナデされるほかは全体的にナデで仕上げられるが、内面は目の細かいハケ目が主に縦方向に微かに残る。胎土は小砂粒を多く含み、焼成はややあまい。色調は内外面ともに淡黄褐色である。

16号甕棺

特徴的な部位を全て欠損し、図示できない。残存部位は胴下半部の底部付近で、厚さは7mm～10.5mm。器面調整はナデ仕上げされる。胎土は砂粒をやや多く含み、焼成はやや良好である。色調は、外面は明橙褐色、内面は淡橙褐色を呈する。

17号甕棺 (第30図、図版14e)

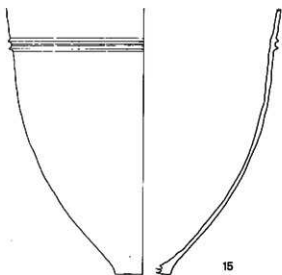
底径8.1cmの甕形土器である。口縁部付近を欠損するが、胴部の外側への張り出しがあまりなく、底部は僅かに上げ底ぎみであり、KIIc式甕棺に併行する時期のものであると思われる。底面に5cm程の黒斑がある。外面は全体的にハケ目調整が施され、内面はナデ仕上げされる。胎土は砂粒を少量含み、焼成は良好である。色調は、外面橙褐色、内面黄褐色を呈する。

18号甕棺 (第30図、図版14a)

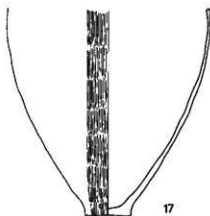
底径10.3cm、胴部最大径44.9cmを測る壺形土器である。頸部より上を欠損するが、胴部と頸部の境と、胴上半部にそれぞれ1条の三角凸帯、胴部最大径位に2条の三角凸帯が巡る。頸部凸帯と胴上半部凸帯の間には、1点から放射状に描かれた篋描文が3ヶ所に残る。1つは上から下に向かって、他の2つは下から上に向かって描かれ、21本以上の線で構成される。本来は4ヶ所に施されていたものと思われる。外面に黒色顔料が塗布されていた可能性があり、胴中央部に黒斑がある。器面調整は、胴部2条凸帯周辺から頸部にかけてヘラミガキされるが、ほかの部位は内外ともに器面の剝離が著しく不明である。胎土は砂粒を少量含み、焼成はあまく、器質は脆い。色調は、外面橙褐色、内面淡白褐色を呈する。

19号甕棺-1 (第30図、図版14f)

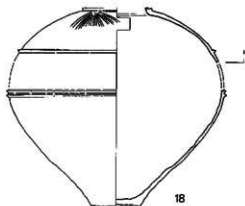
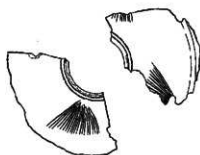
墓境内に下甕状に残存した大型の甕棺で、復元口径63.3cmを測る。やや内側に強く張り出すT字状の口縁をもち、口縁部直下に1条の三角凸帯が巡る。胴下半部を欠損するが、上半部は垂直的に立ち上がっている。胴部にかけて黒斑があり、器面調整は、口縁部と凸帯部がヨコナデのほか、全体的に目の細かいハケ目が残る。胎土は砂粒を殆ど含まず、焼成はやや良好である。色調は、外面橙褐色、内面淡橙褐色を呈する。



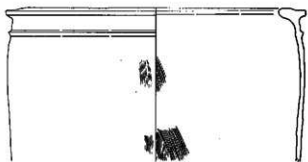
15



17



18



19-1



19-2



第30圖 15,17,18,19号甕棺夾測圖 (縮尺 1/8)

19号甕棺（第30図、図版14g）

墓境内で破砕された状態で出土した甕棺である。大型の甕棺であるが、1と異なり口縁部直下に凸帯をもたない。復元口径60.1cmを測り、やや内側に大きく張り出すT字状の口縁をもつ。器面調整は口縁部周辺がヨコナデのほかはナデで仕上げられる。胎土は小砂粒を殆ど含まず、焼成はやや良好である。色調は内外ともに淡橙褐色を呈する。

20号甕棺（第31図、図版15b）

復元口径67.5cmを測る大型の甕棺であり、底部を欠損する。口縁部上端から胴部凸帯中央までの長さは45.0cmを測り、胴上半部はやや内側に傾きぎみに立ち上がり、胴下半部は大きく内湾する。また、内側に強く張り出すT字状の口縁をもち、胴部に2条の三角凸帯が巡る。胴上半部中央付近から下には黒色顔料が塗布された形跡が残る。器面調整は、口縁部および凸帯部周辺はヨコナデされる。また、胴下半部の外面には目の細かいハケ目が微かに残り、内面には目の荒いハケ目を残す。胎土は砂粒を殆ど含まず、焼成はやや良好であり、持ち上げた感じはやや軽い印象を受ける。色調は、外面は橙褐色、内面上半は橙褐色、内面下半は暗灰色を呈する。

21号甕棺（第31図、図版15a）

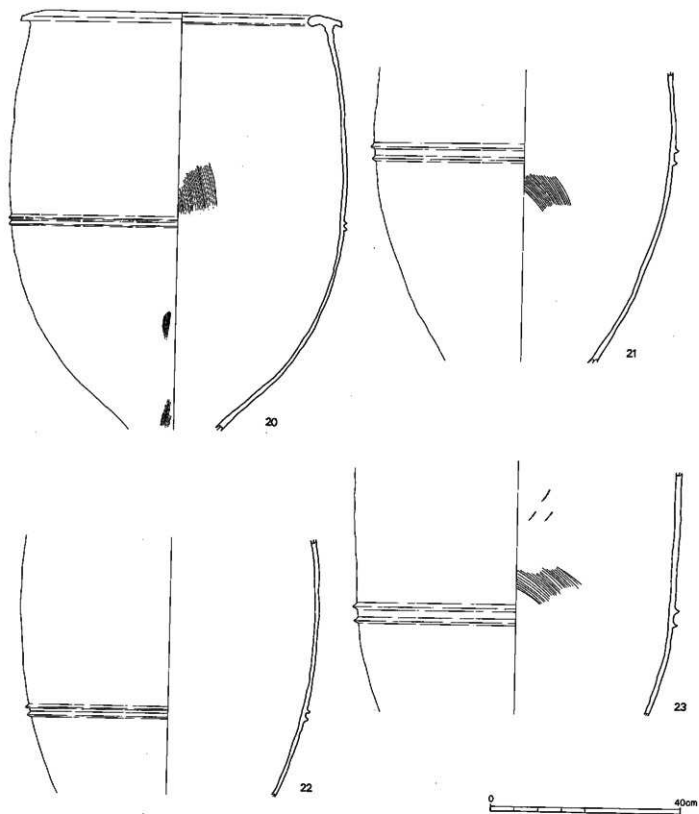
胴部に2条の三角凸帯をもつ大型の甕棺である。2条の凸帯は、それぞれ離れがちに独立的に成っている。口縁部周辺と底部周辺を欠損し、径は復元できない。外面に黒色顔料が塗布される。器面調整は凸帯周辺がヨコナデのほかはナデ仕上げされるが、内面の胴下半部には目の荒いハケ目が残る。胎土は小砂粒をやや多く含み、焼成は良好である。色調は、外面は明橙褐色、内面は橙褐色を呈する。

22号甕棺（第31図、図版15c）

胴部に2条の三角凸帯が巡る大型の甕棺である。口縁部周辺と底部周辺を欠損し、径は復元できない。胴上半部は内湾ぎみである。外面全体に黒色顔料が塗布されていた可能性がある。器面調整は凸帯部周辺がヨコナデのほかはナデ仕上げされる。胎土は小砂粒を多く含み、1mm程度の赤色粒を僅かに含む。焼成は良好である。堅緻で、持ち上げた感じはやや重い印象を受ける。色調は内外面ともに橙褐色を呈する。

23号甕棺（第31図、図版15d）

胴部に2条の三角凸帯が巡る大型の甕棺である。口縁部周辺と底部周辺を欠損し、径は復元できない。胴上半部は垂直的に立ち上がる。器面調整は凸帯部周辺がヨコナデのほかはナデ仕上げされるが、内面には目の荒いハケ目が多く残される。胎土は砂粒を少量含み、焼成はやや良好である。色調は外面は明橙褐色、内面は淡灰褐色を呈する。



第31图 20,21,22,23号青铜器实测图 (縮尺 1/8)

24号甕棺 (第32図、図版15e)

胴部に2条の凸帯が巡る大型の甕棺である。凸帯は小さく、端部は丸みを帯びる。口縁部周辺を欠損するが、底径は10.2cm、胴部凸帯中央から底部までの長さは37.7cmを測る。外面全体に黒色顔料が塗布され、胴上半部に黒斑がある。器面調整は凸帯部周辺がヨコナデのほかはナデ仕上げされるが、外面底部付近にハケ目を残す。胎土は砂粒、小砂粒を少量含み、1mm程度の赤色粒を僅かに含む。焼成はやや不良。色調は外面橙褐色、内面淡橙褐色を呈する。

25号甕棺 (第32図、図版15f)

底部付近しか残存しないが、大型の甕棺である。底径10.8cmに復元される。外面に黒色顔料が塗布され、器面調整はナデ仕上げされる。胎土は砂粒を少量含み、焼成はやや良好。色調は外面橙褐色、内面淡白褐色を呈する。

26号甕棺 (第32図、図版16b)

胴部に2条の凸帯が巡る大型の甕棺である。胴部上半を欠損し、底径13.1cm、胴部凸帯中央から底部までの長さは45.4cmを測る。凸帯は外側に大きく発達し、三角凸帯とは呼び難いが、先端を鋭角的にしようとする意識はあったようであり、三角凸帯からコ字凸帯への変移過程を示すものと思われる。凸帯部直下から底部まで、縦に長い黒斑がある。器面調整は凸帯部周辺はヨコナデのほかはナデ仕上げされているが、外面底部付近と内側胴下半部にハケ目が残る。胎土は小砂粒を少量含み、焼成はやや良好。色調は内外面ともに淡白褐色を呈する。

27号甕棺

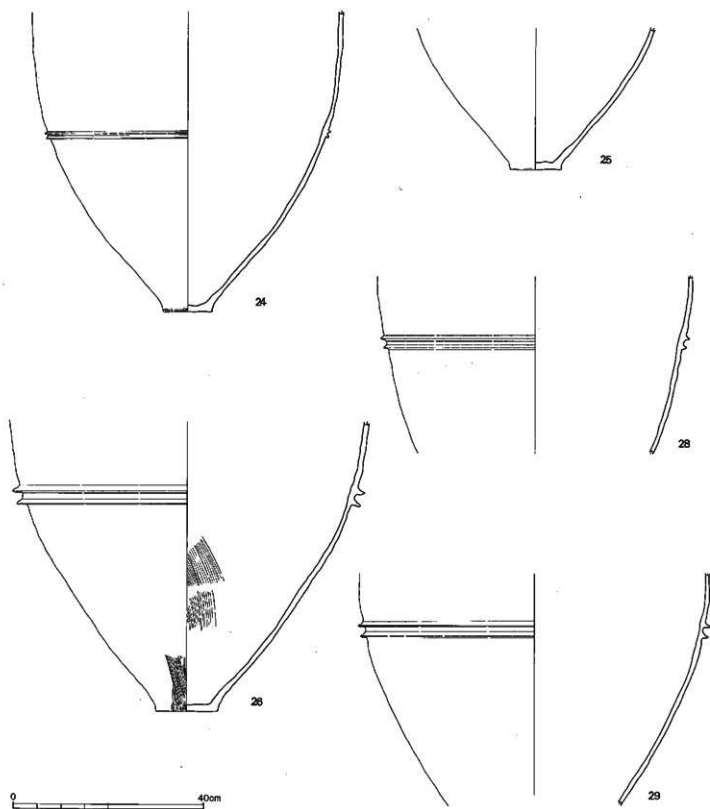
特徴的な部位を全て欠損するため、図示できない。残存部位は胴部であるが、位置を判断できない。厚さは7.5mm~11mm。器面調整はナデ仕上げされる。胎土は小砂粒を少量含み、焼成はやや良好。色調は、外面は暗橙褐色、内面は明橙褐色を呈する。

28号甕棺 (第32図、図版16c)

胴部に2条の三角凸帯が巡る大型の甕棺である。凸帯の上部に10cm程度の黒斑がある。器面調整は凸帯周辺がヨコナデのほかはナデ仕上げされる。胎土は小砂粒をやや多く含み、焼成は良好で、器質は硬質である。色調は外面は橙褐色、内面は淡橙褐色を呈する。

29号甕棺 (第32図、図版16d)

胴部に2条の凸帯が巡る大型の甕棺である。径は復元できない。凸帯は断面三角形を呈し、長さに対して幅が狭く鋭角的であるが、先端は丸みをもつ。器面調整は凸帯周辺ヨコナデのほかはナデ仕上げされる。胎土は砂粒を少量と1mm程度の赤色粒を僅かに含み、焼成は良好。色調は外面は橙褐色、内面は淡白褐色を呈する。



第32图 24,25,26,28,29号墓棺实测图 (缩尺1/8)

34号甕棺 (第34図、図版17c)

転用された甕形土器である。底径12.2cm、胴部最大径47.4cmを測る。胴部最大径位とその上部に、それぞれ1条の三角凸帯が巡る。外面全体に黒色顔料が塗布されるが、内外面ともに剥離が著しく器面調整は不明である。胎土は砂粒をやや多く含み、焼成はやや不良である。色調は外面は暗橙褐色、内面は明橙褐色を呈する。

35号甕棺 (第34図、図版17d)

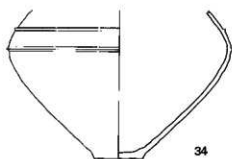
胴部に2条の凸帯が巡る大型の甕棺である。やや上げ底ぎみの底部は径11.6cmを測る。口縁部周辺は欠損するが、胴上半部はやや内湾ぎみではあるが垂直的に立ち上がり、胴部凸帯中央から底部までの長さは43.2cmを測る。外面には黒色顔料が塗布され、底部から底面にかけて径6cm程の黒斑がある。器面調整は、凸帯周辺がヨコナデのほかはナデ仕上げされるが、外面底部には目の細かいハケ目が残る。胎土は砂粒を少量含み、焼成はやや良好である。色調は、外面は橙褐色、内面は淡黄褐色を呈する。

37号甕棺 (第34図、図版17e)

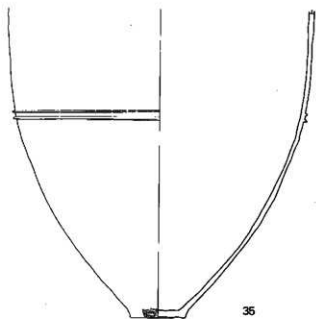
胴部に2条の三角凸帯が巡る大型の甕棺である。底径12.1cm、胴部最大径72.0cmを測る。凸帯は幅に対して長さはあまり発達せず、先端はやや丸みをもつ。口縁部周辺を欠損しているが、胴部凸帯中央から底部までの長さは49.0cmを測り、胴上半部は若干内湾ぎみに立ち上がる。外面全体に黒色顔料が塗布され、器面調整は、凸帯周辺がヨコナデのほかはナデ仕上げされるが、外面底部には目の荒いハケ目が残る。胎土は小砂粒を少量含み、焼成は良好である。色調は、外面は明橙褐色、内面は橙褐色を呈する。

38号甕棺 (第34図、図版17f)

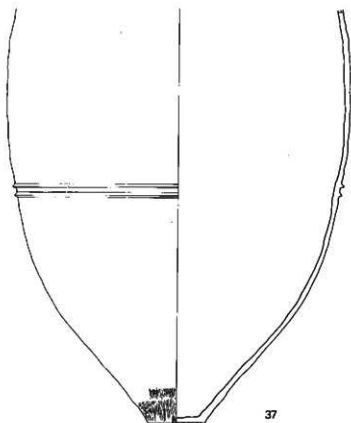
胴部に2条の三角凸帯が巡る大型の甕棺である。底部は径10.1cmを測り、やや上げ底ぎみである。凸帯部から底部にかけて縦長の黒斑、内面胴部中央付近に7cm程度の黒斑がある。器面調整は凸帯周辺がヨコナデのほかはナデ仕上げされるが、外面の胴上半部と底部付近には目の細かいハケ目が残る。胎土は小砂粒を少量含み、焼成はやや良好。底部付近がもっとも焼きが良い。色調は、外面上半は暗褐色、下半は橙褐色、内面は淡橙褐色を呈する。



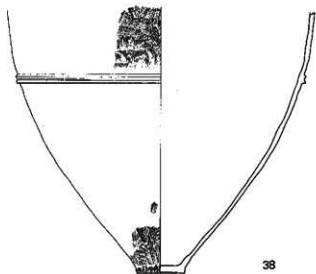
34



35



37



38



第34图 34,35,37,38号墓棺室剖面图 (縮尺 1/8)

39号甕棺上甕 (第35図、図版18a)

大型の甕棺であり、復元口径は50.4cmを測る。口縁部はあまり発達せず、T字状を呈し内傾するが、内側を欠損する。器面調整は口縁部周辺がヨコナデされるほかは、全体的にナデ仕上げされる。胎土は多量の小砂粒と、赤色粒を僅かに含み、焼成は良好である。色調は、内外面ともに暗赤褐色を呈する。

39号甕棺下甕 (第35図、図版18a)

大型の甕棺であり、胴部に2条の三角凸帯が巡る。胴部は倒卵形状を呈する。口縁部周辺と底部の中心部を欠損するが、胴部凸帯中央から底部までの長さは35.8cmを測る。胎土は小砂粒を多く含み、焼成は良好である。色調は、内外面ともに暗赤褐色を呈する。

40号甕棺 (第35図、図版18b)

胴部に1条の三角凸帯が巡る大型の甕棺である。外面に黒色顔料が塗布される。器面調整は凸帯部周辺がヨコナデのほかはナデ仕上げされる。胎土は小砂粒を少量含み、焼成はやや良好である。色調は内外面ともに淡橙褐色を呈する。

41号甕棺上甕

保管中に紛失したため不明である。

41号甕棺下甕 (第35図、図版18c)

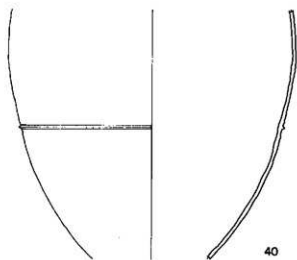
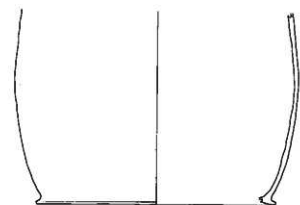
内側にやや強く張り出すT字状の口縁をもち、胴部に2条の三角凸帯が巡る大型の甕棺である。復元口径63.2cmを測る。器面調整は、口縁部および凸帯部周辺がヨコナデのほかは、ナデ仕上げされる。胎土は砂粒を僅かに含み、焼成はやや良好である。色調は内外面ともに橙褐色を呈する。

42号甕棺 (第35図、図版18e)

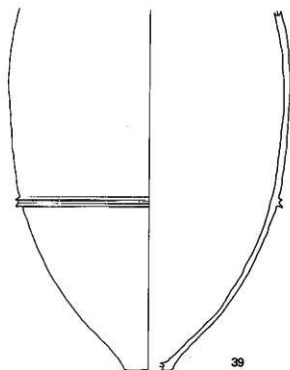
胴部に2条の三角凸帯が巡る中型の甕棺である。胴部は卵形状に丸みを帯びる。口縁部付近は欠損し、胴部凸帯中央から底部までの長さは36.5cmを測る。また、凸帯部を中心に径24cmの黒斑がある。器面調整は、口縁部および凸帯部周辺がヨコナデのほかは、ナデ仕上げされるが、底部外面には目の細かいハケ目が残る。胎土は砂粒を少量と、1mm程度の赤色粒を僅かに含み、焼成は良好である。色調は、外面暗橙褐色、内面は橙褐色を呈する。

43号甕棺 (第36図、図版18f)

胴部に2条の凸帯が巡る大型の甕棺である。径は復元できないが、胴部上半がやや膨らみをもって立ち上がる形態ではないかと思われる。外面全体に黒色顔料が塗布される。器面調整は



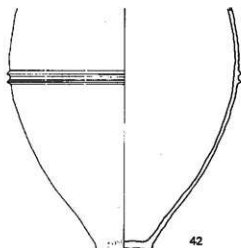
40



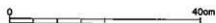
39



41



42



第35图 39,40,41,42号甕棺実測図 (縮尺1/8)

口縁部および凸帯部周辺がヨコナデのほかはナデ仕上げされる。胎土は小砂粒を少量と1mm程度の赤色粒を僅かに含み、焼成はやや良好である。色調は、外面は淡橙褐色、内面は橙褐色を呈する。

44号甕棺上甕（第36図、図版18d）

大型の鉢形土器である。口径は47.6cmに復元される。外側に張り出す逆L字状の口縁部をもち、その直下に2条の三角凸帯が巡る。器面調整は外面胴部にハケ目を残す。胎土は小砂粒、雲母粒を少量含み、焼成は良好である。色調は内外面ともに淡黄褐色を呈する。

44号甕棺下甕（第36図、図版18d）

口縁部を打ち欠いた壺形土器である。胴部最大部位とその上に、それぞれ2条の凸帯が巡る。底部はやや上げ底きみであり、径12.3cmを測り、外面には黒色顔料が塗布される。器面調整は凸帯部周辺がヨコナデされ、そのほかはナデで仕上げられる。また内面の胴最大部付近には接合跡を掻き消すようなハケ目が残される。胎土は小砂粒を少量含み、焼成はやや良好である。色調は内外面ともに橙褐色を呈する。

45号甕棺（第36図、図版19b）

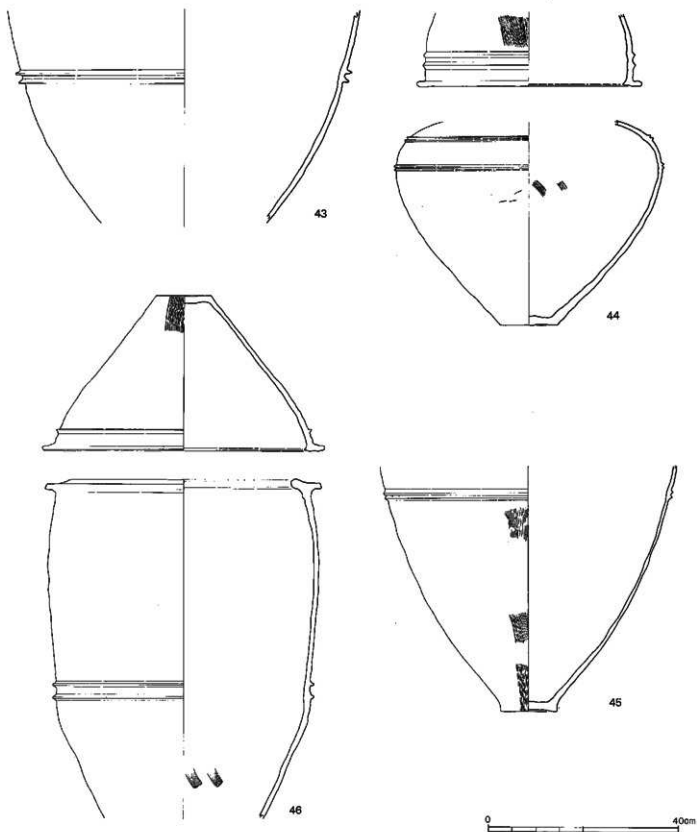
胴部に2条の三角凸帯をもつ大型の甕棺である。底部はやや上げ底きみで、径11.9cmを測る。胴上半部を欠損し、胴部凸帯中央から底部までの長さは46.1cmを測る。また、外面に黒色顔料が塗布される。器面調整は、胴部凸帯周辺はヨコナデされるが、そのほかは全体的にハケ目が残る。胎土は小砂粒を少量含み、焼成はやや良好である。色調は内外面ともに淡橙褐色を呈する。

46号甕棺上甕（第36図、図版19a）

大型の鉢形土器であり、口径58.9cm、底径11.4cmを測る。外側に張り出す逆L字状の口縁をもち、その直下に1条の三角凸帯が巡る。底面には黒斑がある。器面調整は口縁および凸帯周辺はヨコナデされ、そのほかはナデ仕上げされるが、外面底部付近に目の荒いハケ目が残る。胎土は砂粒を少量含み、焼成はやや良好である。色調は内外面ともに橙褐色を呈する。

46号甕棺下甕（第36図、図版19a）

口径57.9cmを測る大型の甕棺である。T字状口縁をもち、胴部の2条の凸帯が巡る。底部周辺を欠損し、口縁部上端から胴部凸帯中央までの長さは45.0cmを測る。器面調整は口縁部および胴部凸帯周辺はヨコナデされ、そのほかはナデ仕上げされるが、内面の胴下半部には目の細かいハケ目が残る。胎土は砂粒を少量含み、焼成はやや良好。色調は、内外ともに淡橙褐色を呈する。



第36圖 43,44,45,46号甕棺実測図 (縮尺1/8)

48号甕棺（第37図、図版19c）

胴部に1条の三角凸帯が巡る中型の甕棺で、胴部が球形状に丸みを帯びる。底径11.4cmを測り、口縁部周辺を欠損するが、胴部凸帯中央から底部までの長さは25.8cmを測る。外面に黒色顔料が塗布され、器面調整は、凸帯部周辺がヨコナデのほかはナデ仕上げされるが、外面底部に目の細かいハケ目が残る。内面は剝離が著しく確認できない。胎土は小砂粒をやや多く含み、焼成はやや良好である。色調は内外面ともに橙褐色を呈する。

49号甕棺上甕（第37図、図版19d）

胴部が丸みを帯びる短胴の甕棺であり、復元口径は55.9cmを測り、胴部に2条の三角凸帯が巡る。外面全体に黒色顔料が塗布された痕跡が残り、器面調整は、胴部凸帯周辺がヨコナデのほかはナデ仕上げされる。胎土は小砂粒、雲母粒を多く含み、焼成は良好である。器質は硬質で、持ち上げると大きさに比して重い印象を受ける。色調は内外面ともに橙褐色を呈する。

49号甕棺下甕（第37図、図版19d）

胴部に2条の三角凸帯が巡る大型の甕棺で、口縁部はT字状を呈する。復元口径は59.4cmを測り、胴下半部を欠損するが、口縁部上端から胴部凸帯中央までの長さは40.4cmを測る。外面全体に黒色顔料が塗布された痕跡が残り、器面調整は胴部凸帯周辺がヨコナデのほかはナデで仕上げられるが、内面にはヨコ方向のハケ目が帯状に残る。胎土は砂粒を多く含み、焼成は不良。色調は内外面ともに橙褐色を呈する。

50号甕棺（第37図、図版20a）

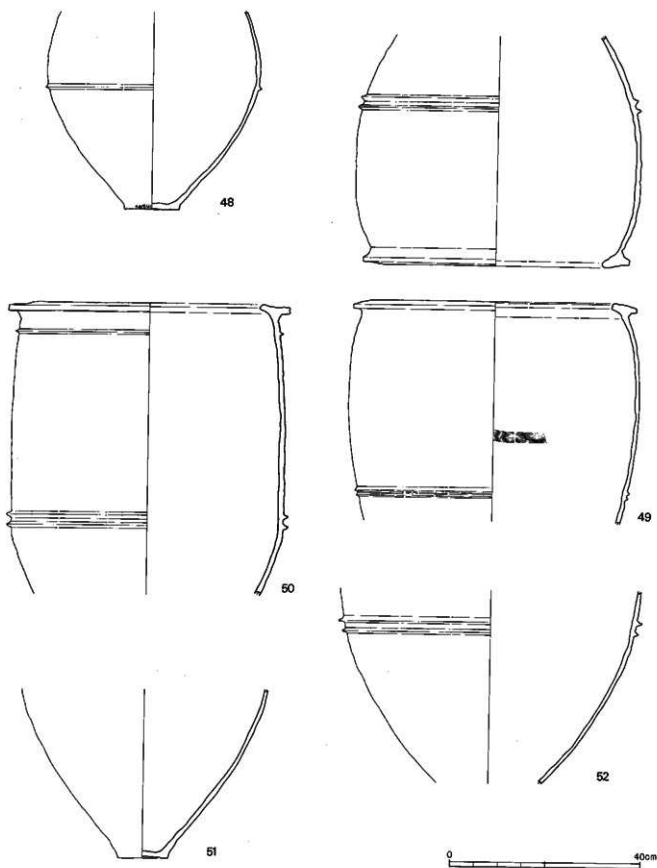
T字状の口縁をもち、その直下に1条の三角凸帯、胴部に2条の三角凸帯が巡る大型の甕棺である。復元口径は58.6cmを測り、胴下半部を欠損するが、口縁部上端から胴部凸帯中央までの長さは45.8cmを測る。器面調整は、口縁部及び凸帯周辺がヨコナデのほかはナデ仕上げされる。胎土は小砂粒を少量含み、焼成は良好である。色調は、外面は明橙褐色、内面は淡白褐色を呈する。

51号甕棺（第37図、図版20b）

底部付近しか残存しないが、大型の甕棺である。底径は10.5cmを測り、やや上げ底ぎみである。外面に黒色顔料が塗布されていた可能性がある。器面調整はナデで仕上げられ、胎土は小砂粒を僅かに含み、焼成は良好である。色調は、外面は淡橙褐色、内面は淡白褐色を呈する。

52号甕棺（第37図、図版20c）

胴上半部より上の部位と底部付近を欠損するが、胴部に2条の三角凸帯が巡る大型の甕棺である。凸帯直下から胴下半部にかけて黒斑がある。調整は、凸帯周辺がヨコナデのほかはナデ



第37圖 48,49,50,51,52号甕棺実測図 (縮尺 1/8)

仕上げ。胎土は砂粒を少量含み、焼成は良好。色調は外面橙褐色、内面淡白褐色を呈する。

54号甕棺

特徴的な部位を全て欠損し図示できないが、胴下半部付近が残存する。厚さは6.5mm～7.5mm。外面に黒色顔料が塗布され、調整はナデ仕上げされる。胎土は小砂粒を僅かに含み、焼成はやや不良で若干軟質である。色調は、外面は淡橙褐色、内面は淡橙白褐色を呈する。

59号甕棺

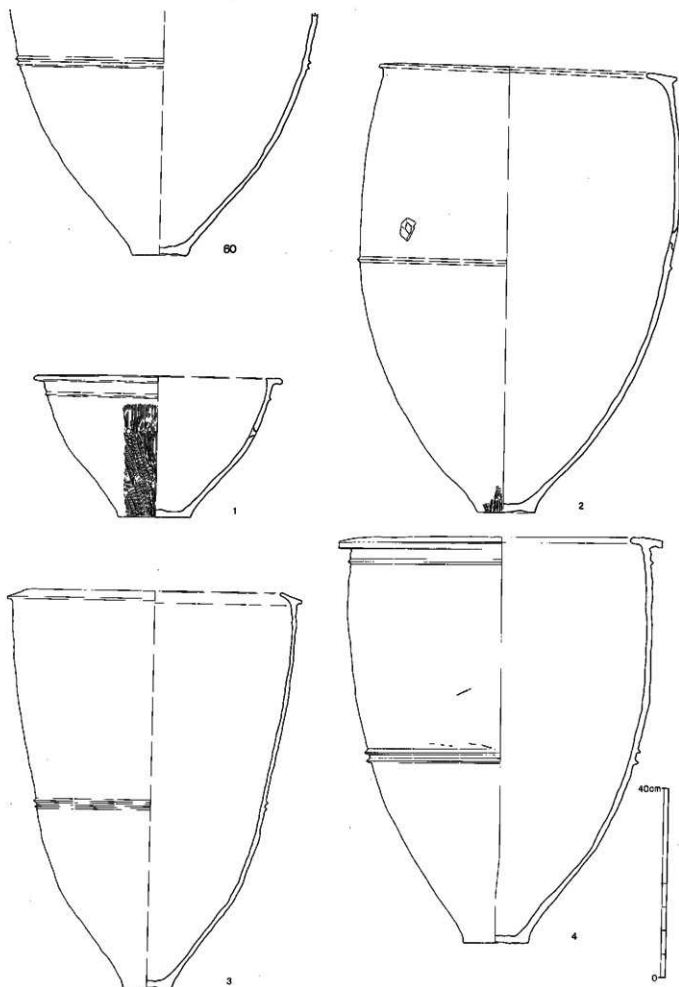
特徴的な部位を全て欠損し図ができないが、胴下半部底部付近が残存する。厚さは6.5mm～10.5mm。外面に黒色顔料が塗布される。胎土は小砂粒を少量含み、焼成はやや良好。色調は外面は暗褐色、内面は淡白褐色を呈する。

60号甕棺（第38図、図版20d）

胴部に2条の三角凸帯をもつ大型の甕棺である。底部はやや上げ底ぎみであり、径10.5cmを測る。胴上半部は欠損し、胴部凸帯中央から底部までの長さは40.9cmを測る。外面に黒色顔料が塗布され、器面調整は凸帯周辺がヨコナデのほかはナデ仕上げされる。胎土は小砂粒を少量と、1mm程度の赤色粒を僅かに含み、焼成は良好である。色調は、外面は暗橙褐色、内面は橙褐色を呈する。

2) 土器溜り出土の甕棺（第38図、図版20ef、21bc）

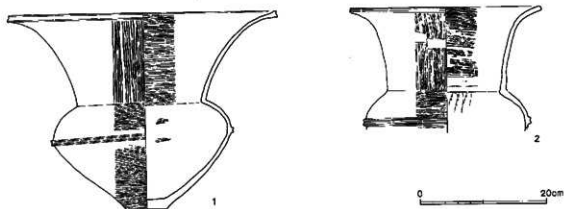
調査区北側の緩斜面には土器溜りが形成されており、破壊され廃棄された甕棺が含まれていた。1は大型の鉢形土器であり、2と折り重なった状態で検出された。2の上甕であった可能性が高い。器高30.0cm、口径52.0cm、底径15.0cmを測る。器面調整は外面は、口縁部および凸帯周辺部がヨコナデされるが、そのほかはハケ目が残される。内面はナデ仕上げされる。胎土は小砂粒を若干含み、焼成は良好。色調は内外面ともに淡橙褐色を呈する。2は器高96.5cm、口径62.3cm、底径12.4cmを測る大型の甕棺であり、外面全体に黒色顔料が塗布される。器面調整は口縁部と凸帯部周辺がヨコナデのほかはナデ仕上げされるが、外面底部付近にハケ目を残す。胎土は小砂粒を多く含み、焼成はやや良好である。色調は内外面ともに淡黄褐色を呈する。3は器高85.0cm、口径61.8cm、底径10.2cmを測る大型の甕棺であり、外面全体に黒色顔料が塗布される。器面調整は口縁部および凸帯周辺部がヨコナデのほかはナデ仕上げされる。胎土は小砂粒を若干含み、焼成は良好である。色調は外面暗黄白色、内面淡橙褐色を呈する。4は器高86.5cm、口径68.2cm、底径13.6cmを測る大型の甕棺である。器面調整は口縁部および凸帯部周辺がヨコナデのほかはナデで仕上げられる。胎土は小砂粒を若干含み、焼成は良好である。色調は内外面ともに淡白褐色を呈する。



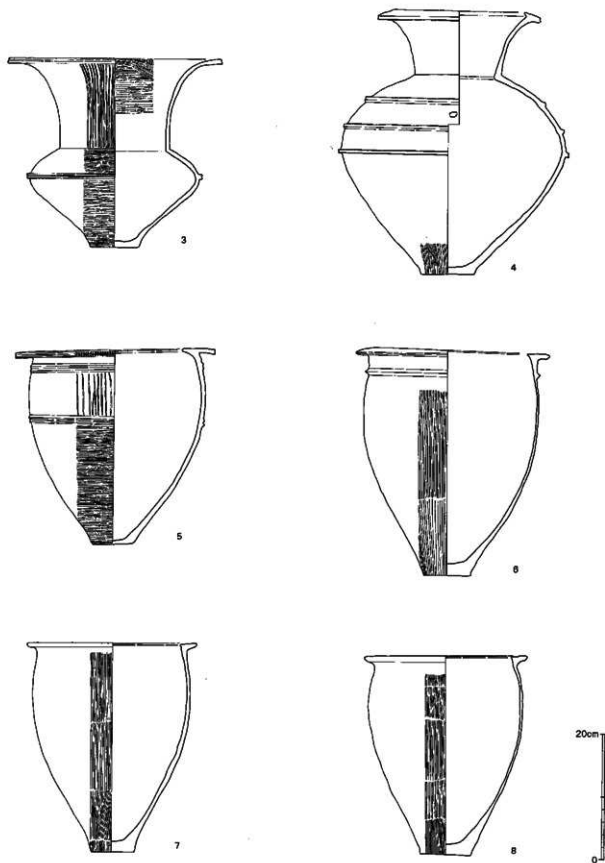
第38図 60号甕棺及び上器留り出土の甕棺実測図（縮尺1/8）

3) その他の土器 (第39, 40図、図版22)

1はSK-23出土の広口壺である。器高31.1cm、口径43.5cm、底径6.3cmを測り、口縁部は朝顔状に開き、肩が強く張る。外面の口縁部から頸部にかけて縦方向の暗文が施され、内面底部付近を除き横方向にヘラミガキされる。また、外面全体と内面頸部から上の部位に丹塗りが施される。2は調査区の西端で検出された丹塗磨研の広口壺である。径31.1cmを測る口縁は朝顔状に開き、肩が強く張る。外面の口縁部から頸部にかけて縦方向の暗文が施され、外面と、内面の頸部より上の部位にヘラミガキが加えられる。丹塗りは残存部位全体に施されている。3は器高29.9cm、口径33.4cm、底径7.5cmを測る丹塗りの広口壺である。口縁部は朝顔状に開き、肩が強く張る。外面の頸部から口縁部に向かって縦方向の暗文が施され、ヘラミガキは外面は横方向、内面は横、或いは斜め方向に加えられる。丹塗りは外面全体に施されるが、内面は剥落し確認できない。4～8は調査区北側の緩斜面に形成された土器溜りの中から出土した土器である。4は鋤先状の口縁部をもつ壺形土器で、器高42.3cm、口径25.5cm、底径8.3cmを測る。器面調整は口縁部と凸帯部周辺がヨコナデのほかはナデ仕上げされ、外面底部にハケ目を残し、胴上半部には外側からの穿孔が施される。色調は内外面ともに明灰褐色を呈する。5は器高31.1cm、口径31.2cm、底径6.2cmを測る甕形土器であり、外面全体と内面口縁端部に丹塗りが施される。口縁部は外側より発達するT字状を呈し、端部には刻みが入り、頸部凸帯と胴部凸帯の間に縦方向の暗文が施される。また、外面全体と内面の口縁部周辺はヘラミガキされる。6は器高35.3cm、口径30.4cm、底径7.4cmを測る甕形土器である。口縁部は逆L字状を呈し、その下に1条の三角凸帯が巡る。底部はやや厚めである。器面調整は、口縁部と凸帯部周辺はヨコナデされるほかは外面は縦方向のハケ目、内面はナデ仕上げされる。色調は明灰褐色を呈する。7は器高33.2cm、口径26.0cm、底径6.6cmを測る甕形土器である。口縁部は逆L字状を呈する。器面調整は口縁部周辺がヨコナデのほかは、外面には縦方向のハケ目が残され、内面はナデ仕上げされる。色調は内外面ともに明橙褐色を呈する。8は器高31.4cm、口径25.7cm、底径7.7cmを測る甕形土器である。口縁部は逆L字状を呈し、頸部はややすぼまりを見せ、底部はやや厚めである。器面調整は口縁部周辺がヨコナデのほかは、外面には縦方向のハケ目が残され、内面はナデ仕上げされる。色調は内外面ともに淡橙褐色を呈する。



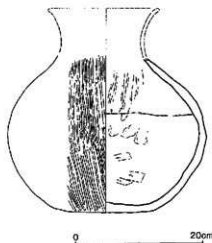
第39図 土器溜りほか出土土器実測図・1 (縮尺1/6)



第40図 土器溜りほか出土土器実測図・2 (縮尺1/6)

4) 朝鮮系丹塗磨研土器 (第41図、図版21a)

調査区北側に形成された土器溜りの中から出土した丹塗磨研甕である。残存器高17.5cm、底径6.8cmを測り、底部は丸底ぎみの平底である。外面全体に赤色顔料が塗布され、縦方向のヘラミガキが加えられる。内面の胴上半部には接合痕が明瞭に残されており、その断面は外傾する。また、内面にはユビオサエの痕が比較的多く残され、胴下半部は、板状工具による擦過の後、なで消される。胎土は1mm程度の小砂粒、小石英粒を少量含み、韓国の同類のものと比較すると、やや緻密さに欠ける(国立慶州博物館・池健吉氏の御教示による)。焼成は良好で、内面の色調は暗灰色、断面の色調は淡褐色を呈する。



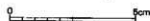
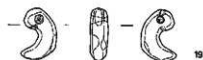
第41図
朝鮮系丹塗磨研土器実測図(縮尺1/3)

5) 甕棺墓内出土遺物 (第42、43図、図版23)

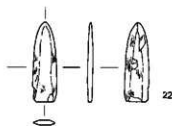
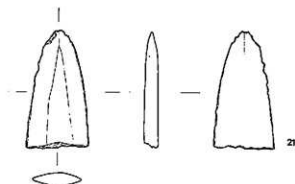
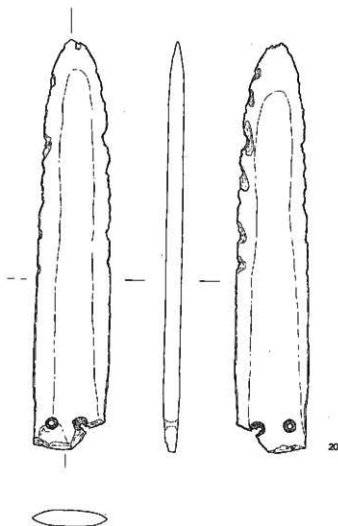
9基の甕棺墓の棺内から、計22点の遺物が出土した。その内訳は管玉18点、硬玉製勾玉1点、磨製石鏃1点、磨製石剣切先1点、磨製石剣1点である。1～18は碧玉製の管玉である。計測値は表2に示す。19は34号甕棺墓に副葬された硬玉製の勾玉である。長さ21mm、厚さ7.5mm、孔径3～4mmを測り、紐孔は両面穿孔である。全体的に丸みをもって作られるが、背部には研磨時に生じたと思われる平坦面がある。色調は半透明の緑色を呈し、濃度の違いによって縞状に見える部分もあるが気泡は無く、不純物を殆ど含まない良質のものである。20は37号甕棺墓に副葬された粘板岩質頁岩製の磨製石剣である。残存長218mm、最大幅40mm、厚さ10.5mmを測る。先端部分が欠けており、そこに至る部位はあまり鋭角的ではない。また、鎧が明瞭ではなく全体的に丸みをもった印象を受けるが、刃部は鋭利であり、打面が左側にある歯こぼれの跡は、右手に持って使用された実用品である事を物語る。基部には僅かに段があり有茎式に分類され、柄に固定する為の1対の孔が両面から穿われている。21と22は11号甕棺より出土した遺物である。21は磨製石剣の切先で、残存長62.5mm、最大幅34mm、厚さ8mmを測る。断面形は凸レンズ状を呈し、粘板岩質の石材が用いられ表面の風化が著しい。22は灰黒色の頁岩製の磨製石鏃である。長さ42.5mm、最大幅14mm、厚さ3mmを測る。断面形は偏平な六角形状を呈し、刃部には縦方向の擦痕が多く残される。

表2 管玉計測表
(mm)

No.	最大径	最大厚	出土棺
1	7.5	2.3	K-12
2	8.0	3.0	K-32
3	8.0	3.0	K-32
4	13.5	3.5	K-32
5	11.0	3.5	K-33
6	7.0	2.5	K-35
7	9.5	3.0	K-35
8	9.0	3.8	K-42
9	9.3	4.0	K-42
10	7.5	4.0	K-42
11	10.0	2.5	K-44
12	7.5	2.5	K-44
13	8.5	2.5	K-44
14	8.0	2.5	K-44
15	8.0	2.5	K-44
16	6.5	2.8	K-44
17	8.5	2.5	K-44
18	7.3	2.5	K-44



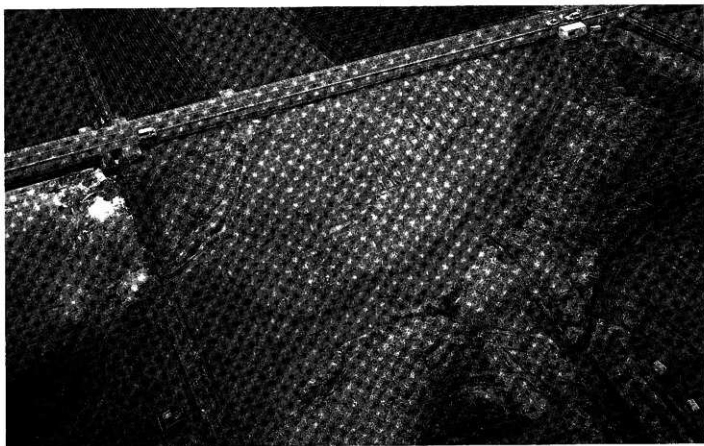
第42图 裴棺墓棺内出土遗物实测图·1 (縮尺 2/3)



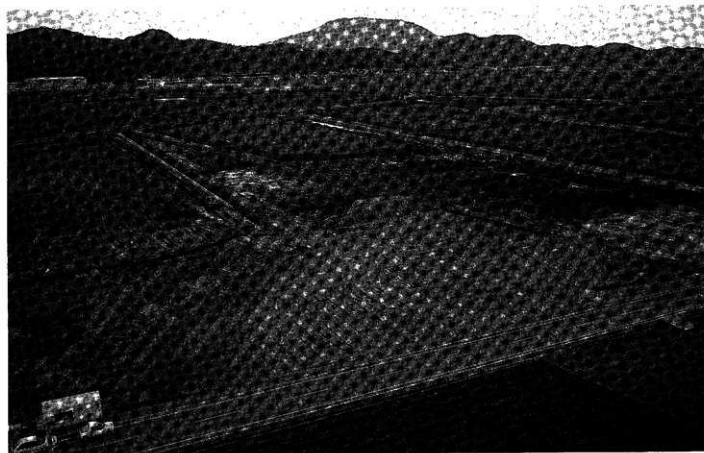
第43图 裴棺墓棺内出土遗物实测图·2 (縮尺 1/2)



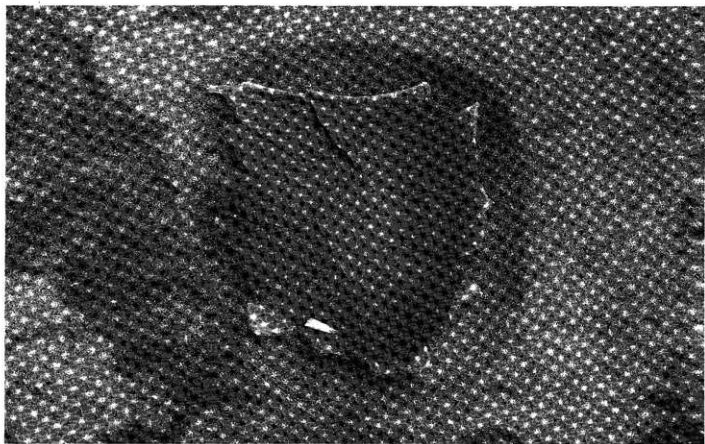




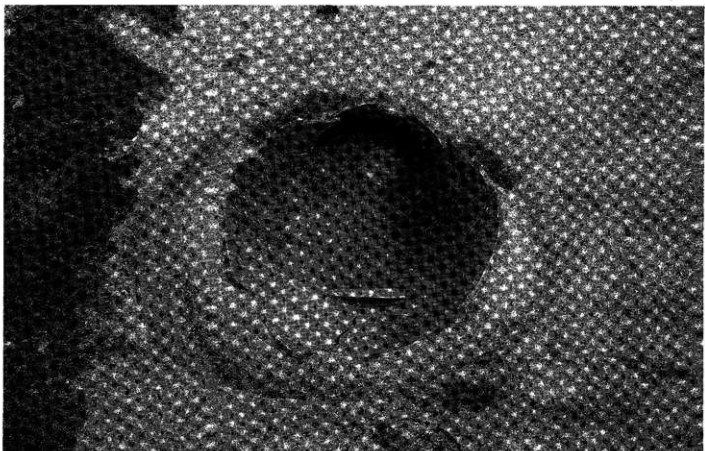
a. 木舟・三本松遺跡全景 2 (北から)



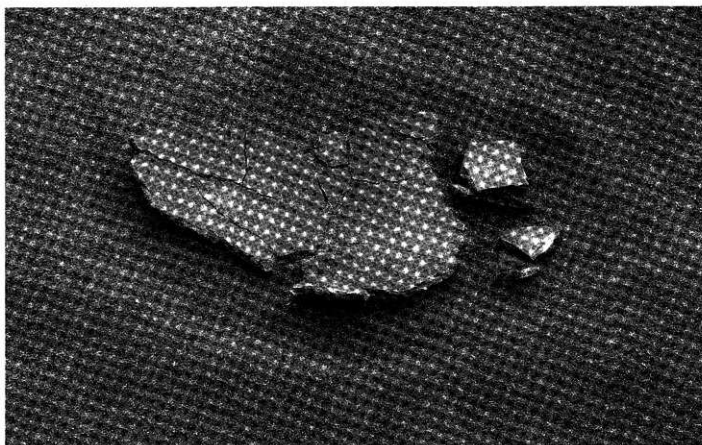
b. 遺跡上空から可也山を望む (南から)



a. 11号墓棺蓋磨製石劍切先出土狀況



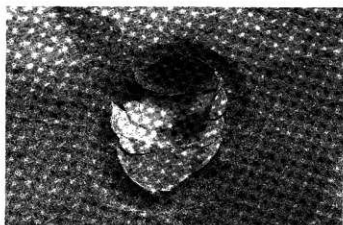
b. 37号墓棺蓋磨製石劍出土狀況



a. 43号墓棺槨硬玉製勾玉出土状況



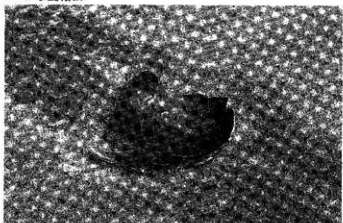
b. 43号墓棺槨硬玉製勾玉出土状況近撮



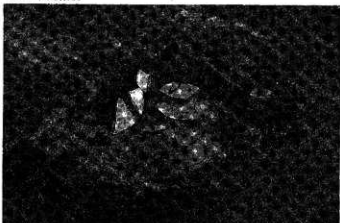
a. 1号菱棺墓



b. 2号菱棺墓



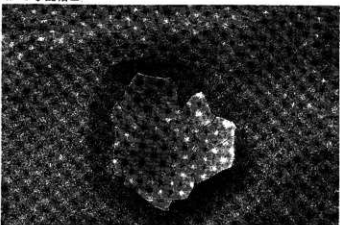
c. 3号菱棺墓



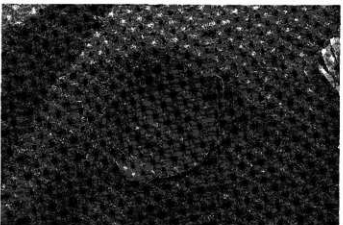
d. 4号菱棺墓



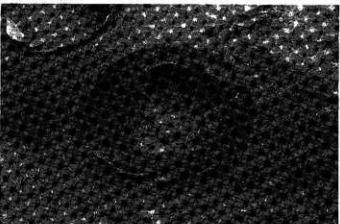
e. 5号菱棺墓



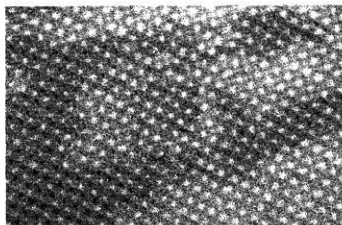
f. 6号菱棺墓



g. 7号菱棺墓



h. 8号菱棺墓



a. 27号菱格基



b. 28号菱格基



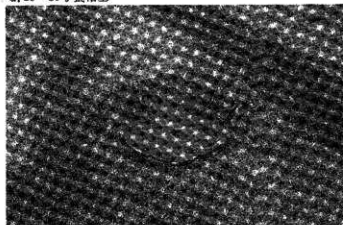
c. 29号菱格基



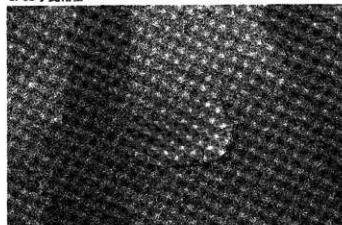
d. 29·30号菱格基



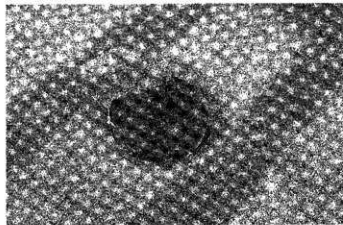
e. 31号菱格基



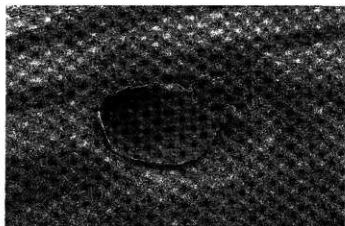
f. 32号菱格基



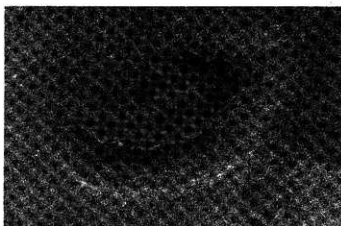
g. 33号菱格基



h. 34号菱格基



a. 35号菱棺墓



b. 38号菱棺墓



c. 39号菱棺墓



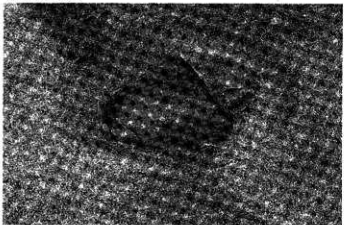
d. 40号菱棺墓



e. 41号菱棺墓



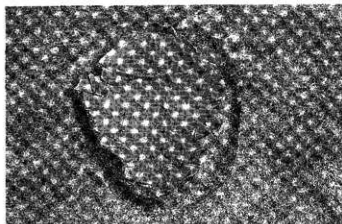
f. 42号菱棺墓



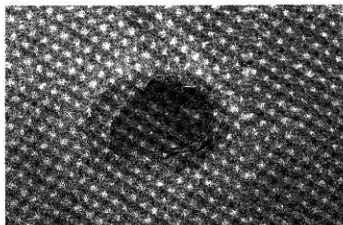
g. 44号菱棺墓



h. 45号菱棺墓



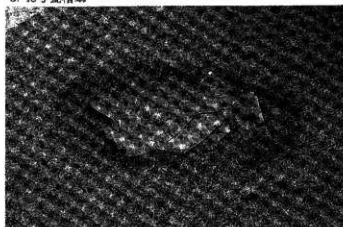
a. 46号变棺墓



b. 48号变棺墓



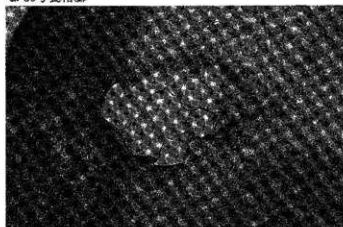
c. 49号变棺墓



d. 50号变棺墓



e. 51号变棺墓



f. 52号变棺墓



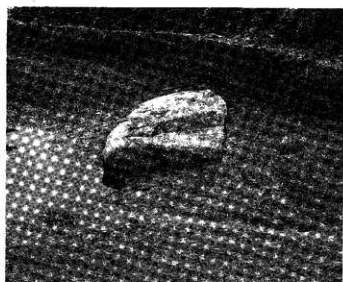
g. 59号变棺墓



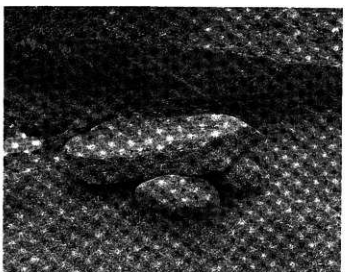
h. 60号变棺墓



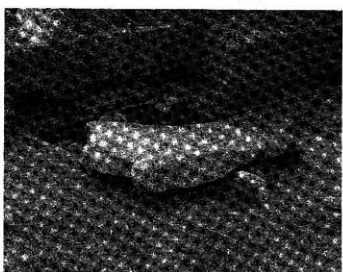
a. 1号大石出土状况



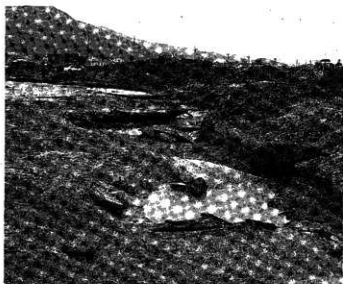
b. 2号大石出土状况



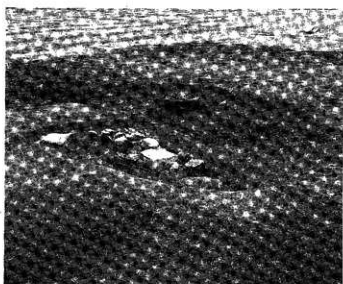
c. 3号大石出土状况



d. 4号大石出土状况



e. 大石出土状况(北侧斜侧面)



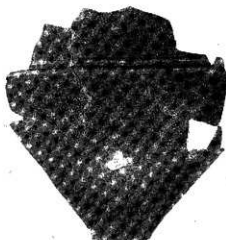
f. 23号土壤



b. 2号甕棺



a. 1号甕棺



c. 3号甕棺



d. 5号甕棺



e. 6号甕棺



a. 7号残片



b. 8号残片



c. 9号残片



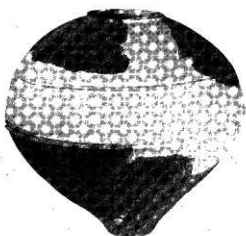
e. 11号残片



d. 10号残片



f. 12号残片



a. 18号残片



d. 15号残片



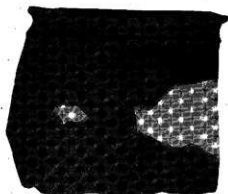
e. 17号残片



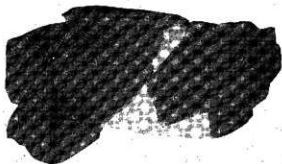
b. 13号残片



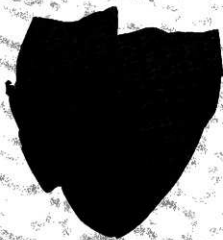
c. 14号残片



f. 19号残片-1



g. 19号残片-2



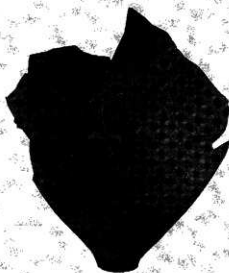
a. 21号菱棺



b. 20号菱棺



c. 22号菱棺



e. 24号菱棺



d. 23号菱棺



f. 25号菱棺



a. 30号残片



d. 29号残片



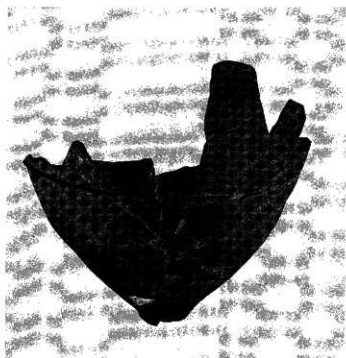
b. 26号残片



c. 28号残片



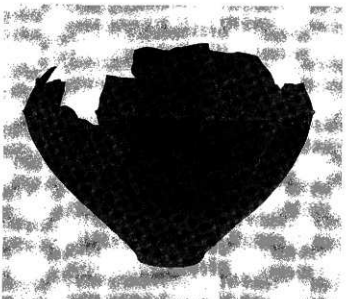
e. 31号残片



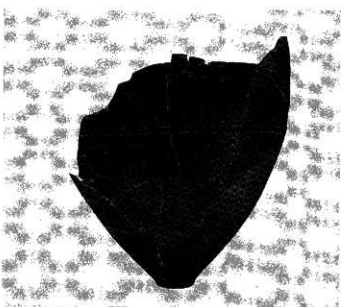
a. 32号瓣棺



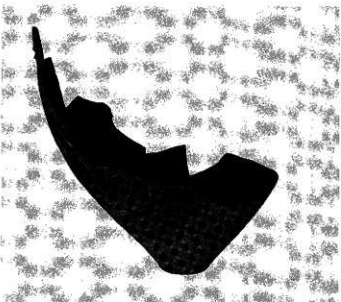
b. 33号瓣棺



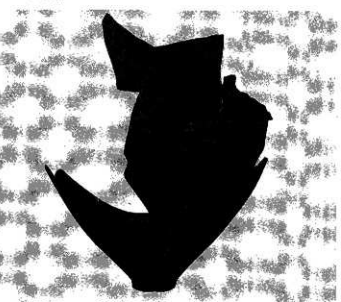
c. 34号瓣棺



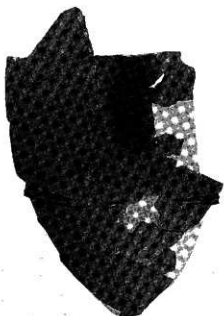
d. 35号瓣棺



e. 37号瓣棺



f. 38号瓣棺



b. 40号残片



c. 41号残片

a. 39号残片



e. 42号残片



d. 44号残片



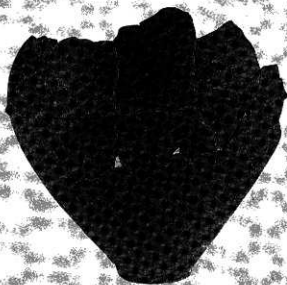
f. 43号残片



a. 46号菱棺



b. 45号菱棺



c. 48号菱棺



d. 49号菱棺



a. 50号甕棺



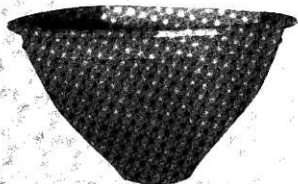
b. 51号甕棺



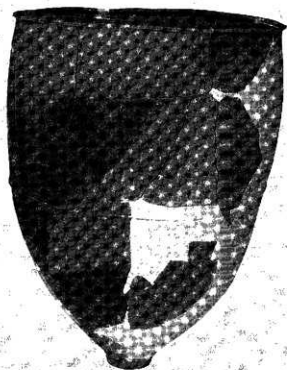
c. 52号甕棺



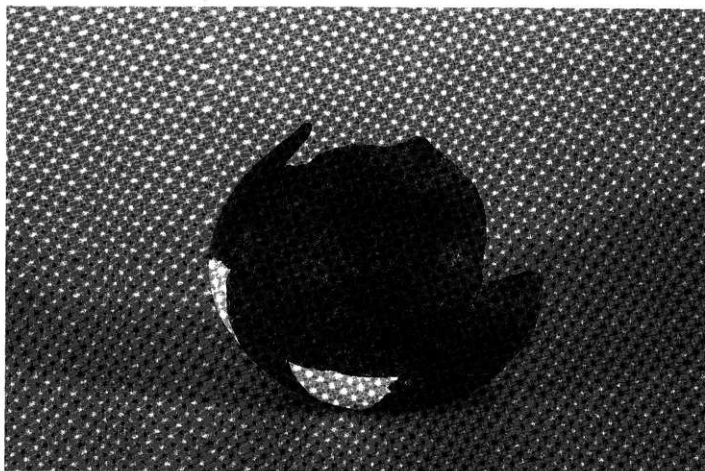
d. 60号甕棺



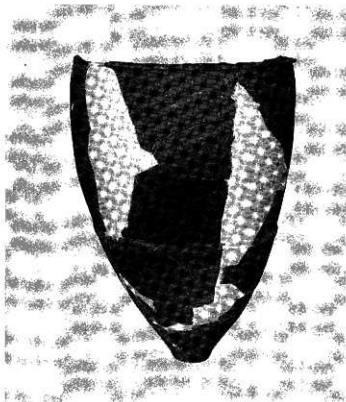
e. 土器溜り出土の甕棺・1



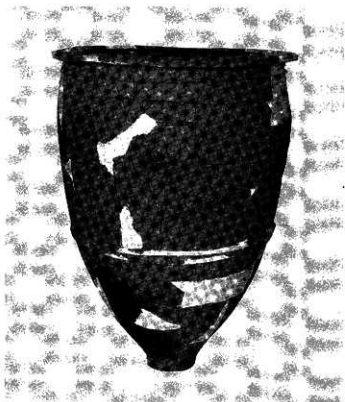
f. 土器溜り出土の甕棺・2



a. 朝鮮系丹塗磨研土器



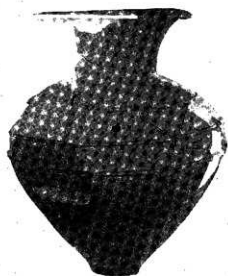
b. 土器溜り出土の夾棺・3



c. 土器溜り出土の夾棺・4



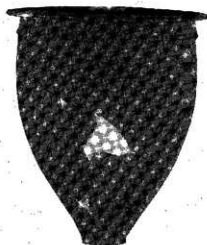
a. 土器溜りほか出土土器・3



b. 土器溜りほか出土土器・4



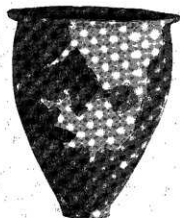
c. 土器溜りほか出土土器・5



d. 土器溜りほか出土土器・6



e. 土器溜りほか出土土器・7



f. 土器溜りほか出土土器・8



K-37



K-43



K-12



K-32



K-33



K-35



K-42



K-44



K-11





